

平成25年度
第24回 大好きいばらき作文コンクール
入賞作品

茨城県知事賞	(4名)
茨城県議会議長賞	(4名)
茨城県教育委員会教育長賞	(4名)
茨城新聞社長賞	(4名)
大好き いばらき 県民会議 理事長賞 (32名) 小学校低学年の部 小学校高学年の部 中学生の部 高等学校の部	

未来のいばらきで

古河市立古河第一小学校 三年 岩田真生

メロン、くり、ナシ、れんこん、しじみ、はまぐり……いばらきけんには、たくさん農さん物や水さん物、みどりゆたかな自ぜんがあふれています。

しかし、二〇一一年の東日本大しんさいによるふく島だいで一原子力発電所の事をきっかけに、いばらきけんの農さん物や水さん物は、ほうしゃのおせんがしんぱいされるようになりました。わたしの大ききないばらきけんの食物が食べられなくなることも、みんなにきらわれてしまうことは、とてもかなしいことです。安全がほしうされた食物がほとんどです。農家の方やりょうしの方のくろうを考えると、よけいにかなしくなります。今よりもっとアンテナショップをふやして、全国の方にいばらきけんの食物を食べてほしいです。

わたしのすむ古が市は、いばらきけんでも西のはしにあり、となり町はさい玉けんやとち木けんになります。近くに大きなゆうえん地やプールなどがないため、休みの日はとなりのけんに出てしまうことが多いです。けん西ちくにももつと大きなゆうえん地があつたらよいと思います。そうなれば、となりのけんからもたくさんの方があそびに来てくれると思います。

わたしはしょうらい、いばらきけんの安全をまもるけいさつかんになりたいです。子どもからお年よりまで、おいしい物を食べて元気で楽しくくらせるいばらきけんを目ざして一生けんめいべん強をし、りっぱなけいさつかんになりたいです。さいがいはないほうがいけれど、もしまだ東日本大しんさいのようなさいがいがあつたら、すぐにみんなをたすけて、少しでも早く安心してもらいたいです。そのために、今はべん強やぶ道がんばります。

ぼくのゆめ、おいしい茨城

牛久市立中根小学校 四年 滝本健一郎

ぼくの大好物はスイカだ。給食でスイカがでる日はワクワクする。給食のスイカは特別なスイカ、「うしく河童スイカ」だ。給食には、「牛久の日」が年二回あつて、この日は牛久産の野菜や肉、お米といった食材を使って作ってくれる。うしく河童スイカは、牛久の日にしか出てこないスペシャルデザート。シャリシャリしてあまくて特別おいしい。

ぼくの学校には給食室がある。調理員さんたちが朝早くからじゅんびして、全校児童と先生方合わせて約九百人分も作ってくれている。給食室からはとてもいいにおいがして、友達とこん立てを当てっこするのがおもしろい。ぼくが好きなのは、しょう油ラーメンやしゅうまい、ごまあえなどで、いつもは苦手で食べられない野菜も、給食だと何だかおいしく食べられる。

とれたてをおいしく料理してくれるおかげで、野菜が苦手
でなくなったし、特別なスイカも食べられて、ぼくは何もか
もうれしいと思っていたのに、先日、お母さんからとても
シヨックな話を聞いた。それは、うしく河童スイカを作っ
ている農家がへつていてということだ。生産者の人たちが高齡
化のため、重いスイカを出荷するのが大変で、スイカ作りを
あきらめてしまうそう。牛久の農家の戸数は年々へつてい
て、今、農業をやっている人も、六十代、七十代と高齡の方
がほとんどだそう。

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんは、つくば市でメロン
農家をしていた。種をまき、毎日の水やり、温度の管理をす
る。四月に畑に植えかえてからも、何百本ものなえを害虫か
ら守ったり、ひ料をやったり、しゅうかくまでたくさんの手
間をかけて育てる。でも、できあがったメロンを買いに来た
人が、
「あまくて、とってもおいしい。こんなにあまいメロンは食
べたことがない。」
と喜んでくれると、苦ろうして作ってよかったと思うそう
だ。

おばあちゃんが言っていた。わたしたちのもっている技
じゅつを若い人たちに伝えて、農業を続けていければと。ぼ
くも同じだ。おいしい野菜や米、肉がなくなってしまう
ように、若い人の力と農家の人たちの技じゅつを合体させて
いければいいのに。

みんな安全でおいしい野菜や米が食べたいんだ。茨城では
おいしいものがたくさん作られていることを多くの人に知っ

てもらい食べてほしい。ぼくのゆめは、農家の人たちの技
じゅつと若い人たちの力を結んでいけるような仕事をするこ
とだ。何十年もかけて身につけてきた技をたやさないため
に。先人の知恵を未来につなげられるように。そして、作る
人も食べる人も笑顔いっぱい茨城県にしたい。

青空に思うこと

かすみがうら市立南中学校 一年 稲生美歩

今年の夏、阿見町にある予科練平和記念館に行きました。
国語の教科書に「碑」という広島原爆についての話が載っ
ていたので、戦争のことをもっと知りたいと思い、行きまし
た。

「予科練」とは、海軍飛行予科練習生の略で、飛行機に乗
るための専門的な訓練をするために、日本全国から何十倍も
の倍率を突破して集まってきた若者たちのことです。予科練
生の制服は、紺の詰め襟の上着に金の七つボタンで、当時の
若者たちのあこがれだったそうです。

全国各地から、阿見町の土浦海軍航空隊という予科練の訓
練基地に集まってきた若者たちは、そこで日々の厳しい訓練
を受けていました。月月火水木金金というほど、休みがなく
厳しい訓練の毎日だったそうです。

そんな予科練生でも、年齢的には、今の私たちとそう変わ
りません。展示されていた机には、落書きの跡が残っている
ものもありました。私も、自分の机に小さな落書きをするこ

とがあるので、予科練生も今の若者とやっていることは同じだなどと思い、親近感を覚えました。

ただ、そんな若者を取り囲む環境や考え方は、今とは全く違う世の中だったのだらうと思います。

八月十七日付けの朝日新聞の社会面に「特攻兵兄弟、語り継ぐ」という記事が載っていました。七十年前大学生だった兄弟が、命もろとも敵に体当たりする特攻兵になりましたが、死線をくぐり抜け生き残り、命と自由の尊さを語り継いでいるという内容でした。その記事の中に、『米国には勝てない』と思っても、学徒出陣に嫌とは言えなかった。声をあげれば特高に引っ張られる。監視や密告が怖かった。」とありました。予科練生が故郷の親に書いた手紙でさえも検閲があり、軍の秘密や弱音を書いていけないかなどを調べられたそうです。たった七十年ほど前に、何の自由もなく、自分の正直な考えさえ表現することができなかった時代があったということに、驚きました。もし、そんな世の中になってしまったら、誰かの悪事を止めたり、注意したりすることができなくなってしまう、安心して生活することができない世の中になってしまふと思います。それは、とても怖いことです。

予科練生にも、夢や希望はあったと思います。厳しい訓練を受けて、その結果神風特攻隊として敵艦に体当たりしたり、回天に乗って人間魚雷になったりしたいと思った人がいたのでしょうか。予科練生は、何のために故郷を離れ厳しい訓練を受けたのでしょうか。国のためなのでしょうか。予科練生の親に宛てた手紙の中に、親や兄弟、家族に楽をさせたという内容のものもありました。一人一人には、それぞれ

の考えがあったのだらうと思います。時代の流れの中で、自分の考えとは違うことがあっても、意見したり発言したりすることもできずに、特攻隊になって死んでいった人もいます。

私が予科練平和記念館を訪れた日は、よく晴れた夏の青空が広がり、暑い日でした。外の広場では、小さな子どもがお父さんと遊具で遊んでいる姿が見られました。しかし、たった七十年前には、その同じ場所で、戦争があり、たくさんの子科練生や町の人、面会に来た家族などが、B29の落とした爆弾で命を落としました。

私が住む茨城に、空襲があったということを未来に伝えていかなければいけないと思います、戦争でたくさん私の私と同世代の若者が死んでいったということを、忘れてはいけないと強く感じました。そして、絶対に二度と戦争をしないと何があっても、言える大人にならなければいけないと、強く思いました。

安心して安全な茨城を目指して

県立佐和高等学校 二年 増^{まし}子^こ果^か歩^ほ

「交通事故」これは、一瞬のうちに起きて多くの犠牲を伴い、自分の命に関わり他人の命を奪いかねない悲惨な出来事である。私が好きなきこ茨城県は、この交通事故での死者数が多く、全国でもワースト十位に入ることが多いという悲しい現実がある。原因はさまざまあると思うが、高校生の私

から見ると一人ひとりの安全意識が足りないように感じる。時間帯、天候、自分自身がおかれている状況などに関係なく常に周りに気を配り、安全運転を怠ってはいけない。これは、自動車やバイク、自転車もみな同じである。ハンドルを持つたら、重い責任のある運転手であることを忘れてはならない。

夏休みが始まったばかりの七月二十三日。中学の同級生がひき逃げに遭い亡くなった。あまりに突然の出来事で、その訃報を聞いたときは驚きと動揺が隠せなかった。希望のある未来があったはずの彼の命を一瞬にして奪った交通事故。茨城県は交通事故が多いとはいえ、今まで身近に感じたことはなく自分には関係のないことだと思っていた。しかし、友人の死を通して他人事とは思えなくなり、安全について改めて考え直そうと思った。

交通事故は、災害と同じで誰も予測することはできない。自分だけが安全に気を付けていても、周りの人々が気をつけていなければ何の意味もない。だからこそ「意識」することが大切なのである。自分中心ではなく、周囲の人々と協力しあい、野球やサッカーといったスポーツのようなチームプレーが必要だと思う。周りをよく見て、時には譲りあい茨城県が一丸となって自動車やバイク、自転車、歩行者みんなが「安全」だと胸を張って言える環境を作っていかななくてはならない。そのために、一人ひとりの意識の改善が必要だ。「初心忘るべからず」この言葉に尽きると思う。自動車やバイクの免許を取得したばかりの頃を思い出してほしい。きつと、緊張感をもって慎重に運転していたはずだ。しかし、慣れて

くるとどうだろうか。余裕がありよそ見をし、携帯電話やカーナビの操作をしていないだろうか。スピードを出しすぎたり、眠い中運転したりしていないだろうか。また、飲酒した後に運転していないだろうか。少しだから大丈夫ではない。法律でも禁止されていることだ。しかし、テレビのニュースで、飲酒運転で事故を起こしているのを見かける。私たちの周りにも、少なからず危険行為をしている人はいるはず。だから、手遅れになる前に振り返ってほしい。自分は絶対に大丈夫という保証は、どこにもないのだ。

ほとんどの人が一度は乗ったことがある自転車。自動車の仲間であり、被害者だけではなく加害者にもなりうる身近で危険な乗り物である。免許は必要ないため、小学校の低学年や幼児でも乗ることができ。最初は上手く乗れず恐怖心から慎重に運転するが、自動車やバイクと同様に慣れてくるとスピードを出したり、片手運転をしてしまいがちだ。二人乗りや傘さし運転、並列走行といった危険でマナーの悪い行為を目撃する。スマートフォンを操作しながら、音楽を聴きながらといった「ながら運転」も危険で問題である。これらは、法律や県の条例に違反するため絶対にやめなくてはならない。自転車が歩行中の高齢者と衝突して怪我をさせたり、意識不明にさせてしまえば多額の賠償金を支払わなくてはならない事件も起きている。私は通学に自転車を利用しているの、決して他人事ではないと感じた。だから、被害者だけでなく加害者にもなってしまうことを忘れずに生活していきたい。私の通っている佐和高は、自転車安全運転モデル校である。在籍する生徒としてルールを守り、周りをよく見ていつ

でもブレーキをかけられる状態で安全に気をつけて自転車に乗りたいと思う。

事故を完全に予測することはできないが、防ぐことは自分たちの力でいくらでもできると思う。人と人との繋がりや絆が強い茨城県。相手を思いやる気持ちは誰にでもあるし、茨城県民なら尚更あると信じたい。だから、警察の力だけではなく、一人ひとりの力で安心で安全な交通事故や違反のない街づくりをしていかなくはならない。道路整備として、コミュニティ道路の普及や自動車やバイク、自転車や歩行車がそれぞれ安全に通行することができる十分なゆとりをもった道路が作られていけばいいと私は思う。十年後、二十年後もその道路が使用されていれば安心で安全に便利な暮らしが実現できる。そして、一人ひとりの力で交通事故を今から減らしていけば、事故が起きない、事故を許さない環境ができて、伝統となり未来へ引き継がれていくだろう。私が大人になったとき、子どもを安心して「いってらっしゃい」と送り出せる街になってほしいと心から願っている。



ぼくのゆめ

つくば市立島名小学校 二年 鶴見 誠

ぼくがなりたいのは、科学しゃです。天文学をけんきゆうする科学しゃになりたいと思っています。

ぼくは、テレビで科学のばん組を見るのが好きです。ようちえんの年長のところに見たばん組で、きょうりゆうがいんせきでぜつめつしたことや、たいようがぼうちょうして、五十六おく年後には、火星のき道までのみこむことをしました。

それから、うちゅうやちきゅうにきょうみをもちはじめました。うちゅうやちきゅうについて書いてある本や図かんを買ってらって読んだり、プラネタリウムにつれていってもらったりして、さらにきょうみをもちました。

ぼくは、科学しゃになったら、しらべたいことが三つあります。

一つ目は、ブラックホールのしくみをしらべることです。光までのみこんでしまうブラックホールの中心が、どうなっているのかをしらべたいです。

二つ目は、ちきゅうのような、生めい体がある星を見つけるてしらべることです。今、生めいがそんざいしそうな星は四こ見つかっているの、ほかにもつとさがしてみたいと思います。

三つ目は、たいようけいの外にあるわくせいについて、サンプルをもちかえって、その星のことをしらべてみたいです。

科学しゃになるためにどりよくすることは、べんきょうをすることです。ぼくがやりたいのは天文学なので、べんきょうの中でも、さん数やりかのべんきょうを、とくにがんばってやっていきたいと思っています。

科学しゃになるというゆめをかなえるのに、ぼくが一ばん大切だと思うことは、科学しゃになりたいと思いつづけることと、科学にきょうみをもちつづけることです。これから、がんばってべんきょうをして、科学しゃになるゆめをかなえたいと思います。

未来へつなぐ地域の絆

筑西市立養蚕小学校 五年 高崎友萌

『につこり笑って、元氣にあいさつ。』

私が三才のとき、お母さんとした約束です。だから、私は、散歩している人や農作業をしている人、庭で洗たくを干している人たちに、元氣にあいさつをしています。そして、地域の人みんなが、私を見守ってくれています。

下校のときのことです。学校を出るときは晴れていたのに、五百メートルくらい歩いたとき、急に空が暗くなってきました。そして、ポツポツと、大粒の雨が降り出しました。「かみなりだ。」

利君が言います。

「どうしよう。」

私とはるちゃん、同時に言いました。そのときです。杉山のおじさんが、大きな声で、

「こっちに入つて、休んでいけ。」

と、私たちを呼びました。私たちは、杉山さんの家で、休ませてもらふことにしました。

そのころ、お母さんは、車で学校に向かつていました。学校に着き昇降口へ行くと、私は、もう帰った後でした。お母さんは、急いで家へもどりましたが、私は、まだ帰っていません。それで、もう一度、通学路を往復しました。でも、私には会えませんでした。

お母さんは、近所の人たちに電話しました。

「家には、来ていないよ。今日は、見かけなかったなあ。」

「雨が降り出す少し前に、家の前を通つたよ。」

話を聞くうちに、お母さんは、私たちの行動が見えてきました。そして、五件目で、杉山さんの家につながりました。

おじさんは、

「かみなりがおさまつたら帰すから。心配しなくていいよ。」と言いました。そして、私たちに、ジュースをくれました。

「ありがとうございます。」

帰りにあいさつをすると、おじさんは、

「また、いつでもおいで。」

と言つて笑いました。

私が転んだとき、急いで家から出てきて、手当してくれました。お姉さんがいます。

「この花、学校へ持っていく？」

と言つて、きれいな花をとつてくれたおばさんもいます。忘れ物をしたとき、

「家の人に話して届けてあげるから。早く、学校へ行きな。」と言つて、自転車で私の家へ行つてくれたおばさんもいます。私は、『地域の人たちに愛され、見守ってもらえて、とても幸せだなあ。』と思います。

このごろ、近所づきあいがなくなつていくという話を耳にします。でも、私の地域では、こまつたとき、みんなで助け合つています。私の地域には、絆があります。私は、みんながつながつていく、この地域が大好きです。

私は、絆を結ぶ一番の方法は、あいさつだと思います。私は、これからも、笑顔と元気なあいさつで、未来に地域の絆をつなげます。

将来の夢

牛久市立牛久第一中学校 二年 井上 加菜

私の将来の夢は、医師になつて茨城の医療を支えることです。私の両親は医療関係の仕事をしています。その影響があり、私もその仕事を志していました。そんなある日、東日本大震災が発生しました。地震や津波により多くの尊い命が奪われました。私はそのとき、命がどれだけ重く、亡くなったときに深い悲しみがあるかを身をもって知りました。それから、人の命を預かる医師という仕事に対しての思いはますます

す強いものになりました。一年半が経とうとして、いる今でも、避難所や仮設住宅などで生活している人が何万人といま
す。その中には、長年の持病や精神的な苦痛などに苦しんで
いる人がたくさんいます。もちろん救急医療の応急手当も重
要ですが、長い時間をかけ、そういった人たちに身近なケア
をすることも大切だと思います。なので、内科という分野で
患者さんに寄り添ってサポートしていきたいと思っていま
す。

今の日本では「医師不足」という問題が深刻化しています。
特に茨城県は人口一〇万人あたりの医師の数が下から数えて
二番目という結果が出ています。それに追討ちをかけるかの
ように、これから急速な高齢化が進み、平成三十二年頃には
高齢者人口割合が三〇パーセントを超えらると考えられていま
す。高齢化に伴い、患者さんの数も増えてくると考えられ、
医師数の獲得と偏在化を無くすことが求められています。私
はこの先の茨城の医療を支えるためにも地域の方々の健康と
笑顔を守らなければいけないと思います。

以前、私は職場体験で地域のクリニックに行きました。ま
ず初めの仕事内容は胃カメラで検査をしている患者さんの背
中をさするというものでした。患者さんは横になつて検査を
していたので、私はどの体勢がいいのか分からず、腕をプル
プルさせながらさすっていました。しばらく慣れた頃、はっ
と「患者さんは今、どんな気持ちで検査を受けているんだろ
う。」と考えました。私は「たった一人で周りを人に囲まれ
ているのできつと不安なんだろうな。」と思い、「大丈夫です
よ。」という気持ちでさすり続けました。検査が終わり外で

待っていると患者さんがベッドで運ばれて検査室から出てき
ました。するとその方は、

「ありがとう。すごく安心したわ。」

と私の方を見てにっこり笑ってくれました。その瞬間、私も
つい笑みがこぼれてしまいました。私は、背中をさすっただ
けなのに患者さんに喜んでもらえたと思うとびっくりしまし
た。ですが、すぐくうれしかったです。腕の疲れなど一気に
どこかへ吹き飛んでしまいました。直接的な医療に関わった
訳ではありませんでしたが、「患者さんの立場に立つて寄り
添う」という一番大切なことを学べたような気がします。

医師になるために必要なことは、患者さんへの思いやり、
コミュニケーション力、体力、基礎学力……挙げ出したらき
りがありません。ですが、今できることからコツコツ努力し
続けていきたいです。そして、地域の患者さんに寄り添い、
サポートしていけるような医師になりたいです。

伝統芸能 「磯節」

常磐大学高等学校 二年 横須賀^{よこすか} 詩^し 織^{おり}

私は、五年前にひたちなか市の平磯に引っ越した。引っ越
しと言っても、同じ市内の勝田からだだったので当初はたいし
た変化はないと思っていた。しかし中学校に入り、地元の子
と話してみると、地域の違いを感じた。まず驚いたのはクラ
スの人の苗字が、同じもので埋まっていたことだ。最大勢力
は「大内」で、学年で五人に一人くらいの割合だった。たし

か、「根本」も同じくらい多かった気がする。このように苗字のこと以外にも驚きはたくさんあった。中には、小さい頃に遊びでよく潮干狩りをやっていたとかいう海沿いならではのものもあった。

そんな中で私が一番驚いたことは、中学校のクラブ活動で「郷土芸能クラブ」というものがあったことだ。その活動内容は、民謡と踊りを習うというものだった。平磯の友達からすれば珍しくないのかもしれないが、私はそのクラブ活動にとても興味を持ち、入った。私はそれまで民謡を聞いたこともなく、その上踊りも、三味線も見ることがなかった。

入るとまず、唄と踊りと三味線のどれをやるのか選ばされたので、私はなんとなく唄を選んだ。私の学年で他に唄をとった人はおらず、先輩も学年に一人ずつで計三人しかいなかった。講師の先生はやはり高齢で、訛りがひどく、耳も遠かったようなので教わるというてもあまり理解できない部分が多かった。私が在学中に教えられた民謡は、「網のし唄」と「三浜盆唄」と「茨城大漁節」と、そして、「磯節」の四つだった。

最初に教わったのは網のし唄で、これはわりと音を覚えやすく、民謡独特の歌い方に気をつければいくらいですぐに歌えた。民謡も思ったより簡単だな、などと最初は思っていた。しかし、次に教わった「磯節」は甘くなかった。網のし唄は、主旋律の繰り返しというような感じだったのですぐ覚えられたが磯節は複雑だった。その上、民謡独特のリズムで、歌詞が微妙なところで切れていたり、音をどこまで伸ばせばいいのかよく分からなかったりと、とにかく大変だった。

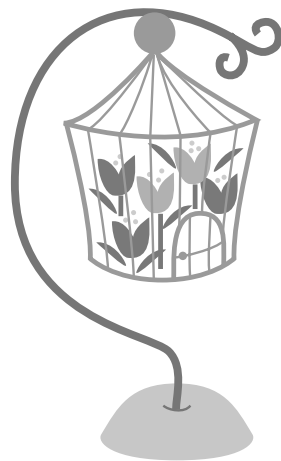
た。二週間に一回ほどの練習だったこともあり、磯節は音を覚えるだけでも数カ月、人前で自信を持って歌えるくらいになったのは一年ほどもかかっていたと思う。

今では磯節も三味線なしで正しく歌えるくらいに覚えている。だが、覚えるまでに要した時間は長かった。それに、私は音を覚えているというだけで、上手く歌えるというわけではないと思う。これでは民謡という一つの伝統芸能を私が引き継ぐことができているのかとても疑問ではある。特に、「三浜盆唄」と「茨城大漁節」に関しては二年生後半かそれより後に教わったもので、本当に、ただ音を覚えただけ、という感じで終わってしまったている。本当の意味で伝統芸能を引き継ぐというのは難しいことだと、今となっては思う。

しかし、私はそれでも民謡に触れることができて良かったと思う。中途半端なままで卒業を迎えてしまったことは非常に残念ではあるが、歌うことは楽しかったし、なにより茨城を少しでも知ることができたからだ。引越す前は、茨城には住んでいるだけという感じで何も知らないし特に興味もなかった。だが、民謡を学んだことで茨城に興味を持つことができた。茨城にも良い文化があると初めて実感することができた。

講師の先生は高齢だった。茨城弁が強くて何を言っているかよく分からず、耳が遠くてこちらの言うことを分かっている様子の時もあったが、そんな先生でも民謡を伝えていく人の一人である。いなくなってしまうえば、伝統を伝えられる人が一人いなくなることになる。そうしてだんだん民謡を知る人がいなくなってしまうと思うととても恐ろしい。

私は、民謡というすばらしい文化を一人でも多くの人に聞いて、知ってもらいたいと思う。独学でも、上手く歌えるようになって、いつかは人に教えることができるようになりたい。何年も、何十年も先も茨城の民謡がたくさんの人に歌われ続けているように。



私がいばらきけん知事になったら

那珂市立菅谷東小学校 三年 広門 奈緒子

私は、いばらきけんが大好きです。もし、私が知事になったら、やってみたいことが三つあります。

まず一つ目は、道路を広げて、通学路を作る事です。私の通る道には、ほ道がありません。毎朝、私たちは、車とぎりの所を歩いていきます。とくに、雨の日は、かさをさしている車にあたってしまいそうなので、とてもきけんです。また、がいどうもないので、こう学年の帰りがおそいと、とてもしんぱいです。もし、道路が広くなり、がいどうもつければ、交通事こもへるし、安全に登校できるようになります。二つ目は、田や畑でむかしのように作物を作るようにすめる事です。おばあちゃんから聞いたのですが、むかしは、私の家のまわりにも、田んぼがあつて、おいしい作物が作れたそうです。

でも、さい近は作物を作らない土地が目立っています。せつかく、いい土地があるのもつたいないと思います。私たちのすむいばらきけんは、気こうもよく、おいしい物がたくさんとれます。農家の人が安心して、やさしい作りができるように、知事の力でたすけていきたいです。

三つ目は、いばらきけん内のおまつりをまもるし事をする

ことです。私のすんでいる町にも、大すけまつりがあります。とてもきれいで、おはやしやおどりがとてもステキです。ほかの地いきの人たちにも、ぜひ見てもらいたいのです。が、せんでんするのにも、おまつりをまもっていくのにもお金がかかります。そこで、知事の力をはつきして、まもっていきたいと思います。

このようにして、いばらきけんを今よりもつとすみやすくして、すばらしいけんであることを全国の人たちに知らせていきたいです。

希望いっぱい茨城に

常陸大宮市立御前山小学校 六年 橋本実咲

十年後の茨城、どうなるかはだれにも分かりません。でもこれからの私達の行いしだいで、希望いっぱい茨城になるか、もしくは反対になるかもしれません。希望いっぱい茨城にするにはどんな事をすればよいのかを考えていきたいと思ひます。

一つ目は、自然がいっぱいの茨城にすることです。十年後になると、だいたいの物が近代的になつていていると思ひます。

でも自然までなくなつてはいけません。自然があるから人は生きていられ、自然があるから地球なのです。そんな自然を茨城からなくしてはいけません。木は、何かに利用されるために切られています。そして、減つてきています。そんな仕組みを変える方法の一つとして、つくば学園都市の最先たん

の研究で自然の代わりになる物を見つけ、それを利用します。また、私達も今から植林を進んでやり、自然を増やし続けていくのです。こうすれば十年後の茨城は、自然がいっぱいになります。

二つ目は、観光客に来てもらい、茨城を盛り上げることです。今の茨城には、つくばエキスプレスや茨城空港、さんふらわあなどの便利な交通手段があります。それを生かして観光客に来てもらいます。また、茨城にしかない、できない観光名所を作ります。観光名所は茨城県民みんなにアンケートを取って決めます。多くの茨城県民に力を借りるのです。茨城のことは茨城のみんなが決めます。こうすれば十年後の茨城は観光客があふれ、みんなの力で茨城が盛り上がったと実感できるでしょう。

最後は、思いやりの心を持ったやさしい人々がいっぱい茨城にすることです。これは、一人一人が考えなければ実現しません。でもこれが実現すれば、絶対に希望いっぱい茨城になります。例えば「思いやり週間」を作ります。「思いやり週間」では一日一回、相手を思い行動します。簡単に出来そうでつい忘れてしまう思いやりを行動に表すのです。だからのために一生けん命になれたら、すてきだと思いませんか。このようなことを真げんに考えて行動することが、今もこれからの時代にも必要だと思えます。本当に一人一人が考え、こんな活動をしたらやさしさあふれる茨城になることでしょう。

この三つのことをなすとげるには、あることが必要です。それは、みんなが協力することです。十年後の茨城を希望

いっぱいにするために、本当に一番大事なのは、みんなで協力することだと思います。十年後の茨城は、自然がいっぱい、観光客がいっぱい、思いやりのある人がいっぱい、みんなの協力する姿がいっぱいの茨城になってほしいと思います。十年後はそんな希望いっぱいの茨城に絶対なつてほしいです。今の茨城も大好きだけど、十年後はもっともっと大好きになつてほしいです。

買い物難民

つくば市立竹園東中学校 二年 矢 吹 友佳子

私の曾祖母は、おとしの十一月に九十九才で亡くなった。となりに息子夫婦が住んでいたとはいえ、亡くなる年の三月まで、自分で食事を作り、掃除をし、洗濯をして一人元気な暮らしていた。そんな曾祖母の悩みは、「買い物をするお店がなくなつて困っている。」であつた。

水戸の中心街を少し離れた八幡町というところに先祖代々住んでいた。生前曾祖母のうちへ行くのにバスを降りると、母はいつもシャッターの降りているお店らしい建物を指さしてこんな話をしてくれた。

「ここがお豆腐屋で大きな水をはった入れ物の中にお豆腐が入つていて、それをすくつてお豆腐のケースに入れてくれたんだ。」

「ここがやおや。天井からざるがぶら下がつていて、そこに

お金が入っていたよ。」

「ここがお肉屋。卵がもみがらの中に入っていてそこから取り出して買うんだ。一人でおつかいにいくとコロケなんかお駄賃っていつてくれたんだよ。」

「ここがお布団屋。子ども布団を作ってもらったよ。」

「ここは、駄菓子屋。くじを引いたり、アイスを買ったり、花火を買ったり、おばさんもやさしかったなあ。」

他にも魚屋、電気屋、病院、瀬戸物屋など、今では誰も出てこない、シャッターの閉まったお店がある。

母は、毎週のように曾祖母のうちへ行き、曾祖母が買い物かごを持って買い物へ行く時必ずついていったそうである。

お店屋さんとのやりとりを聞くのが楽しかったと振り返って話してくれるのだ。それに、一人でおつかいに行くと「えらいね。」とほめてくれるのがうれしかったと話してくれた。

九十九才まで、ほぼ一世に渡って生きてきた最後の悩みが、買い物をするところがなくなって困ったとは、かわいそうだと思う。最後のころは、曾祖母の娘である私の祖母が買物を頼まれて、自転車で買い物をしていたそうだ。

私は、つくば市の中心街に住んでいる。買い物はだいたい大きなスーパーである。物を買うのにお店の人と話すということとは、めつたにない。だから、母の話を聞いていて、不思議な感じがする。

近ごろニュースで買い物難民が増えていると聞く。車社会になって郊外の大型店に行ってしまう。私もよく行くが、車を駐車するのも大変なぐらい土日はにぎわっている。そこでは、すべてものがそろっているのでもともとも便利である。で

も、母が話してくれたようなお店の人とのふれあひなんかあまりないと思う。

曾祖母が昔のように歩いて行ける範囲にお店があつて、お年寄りでもお店の人として必要とされている実感を持つことができるなら、孤独にもならないでいられると思う。

商店街にお客さんが戻れば、お店も昔のように増えていくだろう。どうすればよいのか、それは、地域に守られ地域を大切にするという意識を持つことが一番大切のように思う。

震災を経験して今、私が伝えること

県立水戸高等特別支援学校 三年 大塚 健太郎

東日本大震災を経験し、私は何が出来るのだろうかという将来への疑問が浮かびました。震災が起きた二〇一一年三月十一日、私は中学校を卒業し、高校入学に向けて準備をしました。午後二時四十六分東日本大震災発生!! この日、私は祖母の家において、テレビがつかずラジオをずっと聞き、「岩手県・宮城県震度六強」と言っていました。茨城県も東北二県と同じ震度六強でした。自分はまさかこのような地震が来るとはまったく思ってもいかなかったです。

岩手県陸前高田市「奇跡の一本松」はよくニュースで流れます。「奇跡の一本松」とは東日本大震災の津波で唯一流されずに残った松のことを指しています。高校に入学して東北復興支援ソング「ミンナデトモニ」という曲に出会い、この曲を初めて聞いた時は涙がでてきて、震災のことを思い出しま

だまだ東北の人は辛い毎日を過ごしているんだなと思いましたが。私は、もし同じことが起こった時、私達を守ってくれた大人のようになれるだろうかと高校に入学してからもずっと考えていました。震災が起こらなかつたら、きっと考えられなかつたことだけれど、今を生きていくためには必要なことだろうと思うのです。

私の好きなアーティストは松任谷由実さんです。彼女は、東日本大震災チャリティー企画「ユーミン×SONGS みんなの春よ、来い」プロジェクトをたて、復興のために一万人が合唱で参加し作り上げた新しい「春よ、来い」を制作。その収益を被災地へ義援金として送りました。NHK紅白歌合戦にも出場し、「みんなの春よ、来い」を披露し、紅白では紅組のトリで歌唱予定が四十五番目となり、ラストの演出は、出場者全員で歌唱し、その後ユーミンが「春よ、来い」早く来い」と言って幕を閉じました。そんなユーミンのライブにも行ったことがある私。自分でも東北復興に向けて、何か出来ることがあればユーミンみたいなチャリティー企画をしたいです。日本テレビでいうと二十四時間テレビのような感じですよ。一九九五年一月十七日に発生した阪神淡路大震災の時もユーミンの「春よ、来い」でみんなが元氣になり、ライブでも披露されます。私は特にサビの部分が好きです。「春よ、遠き春よ、まぶた閉じればそこに」の歌詞部分が好きです。東北の人はまだまだ大変な暮らし辛い毎日を過ごしています。奇跡の一本松みたいに震災時、津波に流されず残ったようにこれからの生活を一日一日を大切にし、自分を信じて、たくさんの名曲とともにめぐり合い、自分の人生を

大切にしたいです。

以前、私は人付き合いが苦手で、人と協力し合うというものを避けていました。今でこそ、人と関わるのが、得意になりましたが、人に話しかけることもまともに出来なかつた以前の私には、小さな助け合いすら難しいことでした。今、人との関わりに大切な意味を見つけることができて、茨城に住んでいて良かったと思います。以前のように心を閉ざしては見えないこともあるのだと知りました。私は、心の強い人間になりたいと望んだ気持ちをお忘れず、今を大切にしながら、努力を重ねていきたいです。

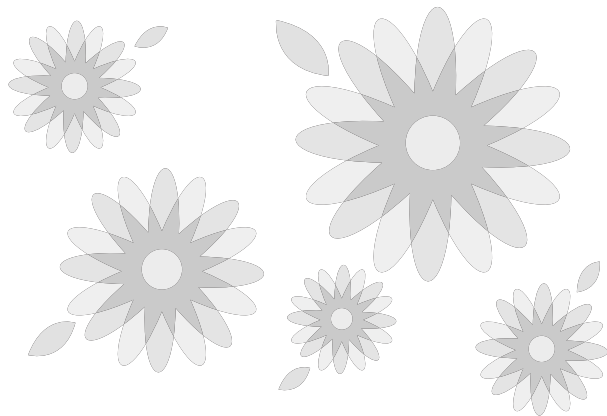
「人という字は、人と人が支え合って出来ている」という言葉があります。震災で起こった後の日本はまさにこのように支え合ってきたのではないかと思えます。私のいない世界を担って行く、今からずっと後の時代を生きる茨城の子供達にも、私の周りにいた優しい友人のような心を知ってもらいたいです。今の茨城をとびきり豊かにして、協力し合うことの大切さを教えたいです。たとえ困難になってもいつかみんなは「答え」の中にいる自分に気がつくはずだよ！共に助け合う世の中になったら、どんなに素敵でしょう。私はそんな風に人々が生きていけるように努力します。「自分なんか幸せになれない」って言ったらだめだよ。自分の可能性を自ら閉ざしているんだよ。可能性を開いて日々進んで行くからね！一人一人がどれほど大切な存在か、導いたかみんな忘れないでね。

私の好きな言葉に「One for all, all for one.」というラグビーで生まれた有名な言葉があります。この言葉は「一人は

みんなのために、みんなは一人のために」という意味を持っています。一人の力ではどうにもならないことでもみんなの力を合わせれば、必ずできるようになると思います。みんなで支え合い、辛い事、楽しい事も共にわかち合える関係を作りたいと思います。

そしてこれからの茨城は、茨城のため、他県のために一人一人が協力していくという気持ちを個人が持ち続けて生活していく事が大切だと思います。そしてこの心が明るい未来へつながっていく事を信じ、安心して暮らせる茨城を作りあげていきたいと思えます。

私は茨城県が大好きです。大好きな茨城が今までよりもさらに繁栄していくことを願っています。これからも一歩一歩前に向かって頑張っていけます。がんばれ日本!! がんばって茨城!!



十ねんごのわたし

境町立猿島小学校 一年 人^{ひと} 見^み 綾^{あや} 音^ね

十ねんご、わたしはこうこうせいになっていきます。こうこうせいになって、いっぱいべんきょうしてだいがくにいきたいです。

わたしは、おかあさんみたいにかんごしになりたいからです。

いばらきには、おじいちゃんやおばあちゃんがいっぱいいて、ぐあいが変わるくてびょういんにいくひとがおおいので、たすけてあげたいからです。

でも、いばらきにはおおきなびょういんがすくなくて、ぐあいがわるくなっても、きゆうきゆうしゃではこべるびょういんがなかなかないと、おかあさんがいっていました。

ときどき、おかあさんのしよくばにつれていってもらいますが、いつもはみたことのないくらいしんけんなおおをし、しよくばのひととはなしているのをみて、かっこいいなとおもいます。

わたしがおおきくなるころに、ちかくにおおきなびょういんができているといいなとおもいます。

そのためには、いばらきけんがもつとげんきになってくれたらいいなとおもいます。

わたしたちが、あそぶところとかかいものするところがいっぱいあつたら、もつといばらきけんがげんきになるとおもいます。

まだ、いばらきにきたばかりで、なにもわからないけど、みどりがいっぱいあるいばらきがわたしはだいすきです。

そんなだいすきなところで、ひとをたすけるしごとができたらうれしいです。

もつと、たくさんともだちができたらもつとげんきないばらきになるとおもうので、たくさんひとたちに、きてもらえたらいいとおもいます。

「ふるさと」について考える

土浦市立下高津小学校 六年 篠^{しの}原^{はら} さら

私は今年、たかつ合唱団でNHKコンクールの課題曲として嵐の「ふるさと」を歌いました。この夏、何回も歌ったこの曲がきっかけとなり、私のふるさととなる茨城のこれからについて考えてみようと思いました。

私は、茨城にもつと他県から人を呼んで活性化させたいと考えました。どうしたら良いかの方法として次の二つの案を思い付きました。

一つ目の案は「豊かな自然をとりもどして観光客を呼びこもう」ということです。茨城は霞ヶ浦、筑波山、桜川、袋田の滝などたくさん自慢できる自然があります。しかし、そのほとんどが残念なことに人の手によって汚されつつありま

す。特に、霞ヶ浦は昔は泳ぐことができたのに、今では生活排水などによって、水が汚れてきてしまったので、これ以上水が汚れないように心がけ、さらに昔の霞ヶ浦よりきれいになるようにボランティア活動などをして、霞ヶ浦をレジャースポットにしたいです。そして自然を楽しみに茨城に来てほしいです。

二つ目の案は「住みやすいまちをつくっていいこう」ということです。茨城は東京に近い県なので、都内で働いている人が生活することが可能となる県です。そこで、たくさんの方がこの茨城に住んでくれるようにするにはどうしたら良いか考えました。そこで働く人が働きやすい環境をつくるのが大切だと考えました。以前、母は私が生まれるまで東京で仕事をしていたのですが、子育てとの両立が難しくなり仕事を辞めてしまったそうです。このような人がたくさんいるのではないのでしょうか。そこで育児施設を充実させたら良いと考えました。例えば、駅前に保育施設や生活用品を売っているお店を遅くまで営業することで母親の育児にかかる負担を減らして働く女性を増やすなどという案を考えました。他にも医療を充実させることが最大のポイントだと考えました。今、茨城の小さな町では総合病院がないため、片道一時間以上もかけて治療に来るということを聞きました。この状況では「住みやすい」とは言えないので未来には少しでも病院が増えたら良いと思います。私の将来の夢は医者になることです。そして地域の医療に貢献したいと思っています。そのためにも今からたくさん勉強し、立派な医者になりたいです。そして医者が多く、みんなが安心して暮らせるような町にし

たいです。

最後に私の考えた茨城に一步でも近づくことができるよう、みんなが助け合い、知恵を出し合いながら「快適な住みやすい茨城」を目標に努力していきたいです。

みんなが大好きな「ふるさと」になりますように……。

知れば知るほど好きになる、茨城県

水戸市立見川中学校 三年 鈴木 木 彩 予

以前私は、こんな噂を耳にしたことがあります。

「茨城県って、四十七都道府県で、一番人気ないらしいよ。」
「……。」

ただただ、ショックでした。日本三大庭園の一つは、偕楽園!! 偕楽園は茨城県にあるんだぞー!! と、大声で叫びたい気持ちでした。

確かに茨城県で有名といえば、納豆にさつまいもにれんこん。ぱつとしないといえ、ぱつとしないかもしれないでも、いくらなんでも最下位はないでしょうと思いました。

それから私は考えました。なぜ、最下位なのか……と。よほどのことがない限り、最下位なんて、ならないはずではないか。そう思ったのです。しかし理由が見つかりませんでした。一人では解決できないと気づいたので、初めに噂を教えてくださいました。

「茨城ってどうして最下位なんだろう? これといった理由が見つからないよね?」

すると友達は、一発で答えをだしてしまいました。

「影が薄いからだよ。多分……。」

認めたくないけれど、おそらく正しい気がしました。華やかに目立つものもなければ、話題になるものもない。方言だって、なぜか東北地方の県と同じように、思われています。さらに、茨城県の地理的位置すら把握していない人は多く、これもまた、茨城県は東北地方だと思っっている人がいます。

改めて、そのような事実を受けて、悲しくなりました。私はどうして茨城県民なんだ……。そんなことではありません。他の県の人は、どうして茨城県のことを、もっと知ろうとしてくれないのか。茨城県のいい所を見てくださいのか。ということですよ。

私が住む水戸市は、「水戸黄門」という、誰もが知っているドラマの主人公、徳川斉昭公が築いた、偕楽園、すぐ近くには、弘道館があります。春になると、梅まつりが開催され、好文亭や千波湖に咲き誇る梅を、心ゆくまで味わうことができます。また、夏には三日間に及び、黄門祭りも開催され、水戸の歴史を感じることができます。

県北、大子町には、袋田の滝があります。四季折々、滝の雰囲気が変わり、特に、秋に紅葉した木々とのコラボレーションも素敵ですが、滝全体が凍り、辺り一帯凜とした空気が漂う、冬の袋田の滝も目をみはるものがあります。

そして私が最もアピールしたい、茨城県の良さは、行事でも施設でもない、茨城県民そのものです。なぜか茨城県民は、明るい人が多く、元気ではつらつとしています。また、細かいところに拘る人が少なく、何となくみな、大ざっぱで

す。だから、初対面でも話しやすいし、親しみやすい。それでいて、みな家族や友達思いだから、仲よくなれば、その仲は一生ものになると思います。よく、普通に話していても、怒っているみたい、といわれる方言も、よく耳をこらしてみても下さい。「だべ」。語尾に濁点は、よくある方言ですが、茨城県は、「だっぺ」。「べ」です。少しかわいいと思いませんか？ きゃりーぱみゅぱみゅだとかわいいけれど、ぎゃりーぱみゅぱみゅだとかわいくない、そんな感覚だと思います。知れば知るほど好きになる。あたたかい人柄に、落ち着く都市。他人から見れば、華やかさはないけれど、住んでみれば良さがわかる。斉昭公の思いがまつた梅の都、水戸。そして、住めば都、茨城県。

他の県の人が何といつても、
「やつぱり茨城、一番だっぺ」。

下妻から考える未来の茨城と私

県立下妻第一高等学校 二年 土^{つち}平^{ひら}真奈美^{まなみ}

私は県西の守谷市に住んでいます。交通の便が良く、人通りも賑やかな、とても活気のある街です。そんな私はよく、こんな質問を受けます。

「どうして下妻の学校にわざわざ通っているの？」

……確かに私が通っている下妻第一高等学校、通称妻一が置かれている下妻市は、守谷市とはちよつと雰囲気異なります。買い物をする所はジャスコしかないし、夜になると周

りは真つ暗……。もつと近くにも高校は沢山あるし、高い電車代も払うことになる。そこで先の質問をされた時、私は返答に詰まり、考え抜いた末に、

「なんとなく。」

と顔に苦笑いを浮かべて答えるのです。高校受験の志望校に悩んでいた時期にたまたまパンフレットを見て、直感的に「あ、私はここ通うんだ。」と思ったのが最初の動機でした。

その時はあまり深く考えず、妻一がとにかく頭から離れなかつたのです。

実際、入学してからは様々な困難(?)がありました。会話の訛りや文化や価値観の違い……。たった東西六十キロしか離れていないのにまるでプチ留学気分。しかし、ちよつと時代を感じる常総線で毎日揺られているうち、下妻の本当の姿が見えてきました。

地元ならではの有名なパン屋やレストランがあつたり、住民がよく話しかけてくれたり、限られた場所で思いつきり友達と遊んだり……。一見不便そうに思えた下妻には、守谷にはないものが沢山ありました。駅の近くの商店街にシャッターが下りている数も多い分、余計に地域全体で盛り上がつていこうとしているのを感じられます。

また、私はバドミントン部に入部し、最高の仲間達と出会うことができました。私を含む同学年七人は本当に仲がよく、互いの悪口を聞いたことがありません。気持ち悪い位仲良いよね。と言われる私達の周りにはいつも笑いが絶えず、自分の素が出る落ち着く居場所となっています。他にも下妻に来て多くの人達と出会い、関わりを持つことよって人

間として大きく成長できたと思います。

中学生の頃、「田舎」というワードにあまり好印象のなかつた私ですが、妻一に通つて多くの事を知り、新しい発見をすることができました。それは決して守谷の内側からは見えなものでした。自分で高校を選び、下妻から得た沢山のもの自分への自信は、この先一生私の宝になると思います。私は下妻の、どこかゆつくりとしている生活スタイルと、住民の地元愛が大好きです。もちろん、守谷にもすばらしい点がいくつもあり、恵まれた環境の中で生活していることにも感謝しています。どちらの街も今となっては私の「地元」であり、それぞれの良さに触れることができました。

下妻で学んだことの一つとして地域の「過疎化」という現象があります。この言葉に対して中学校の私はあまり実感がありませんでした。しかし、下妻を少し歩くと確かに老人が多かつたり、商店街も最盛期の賑わいを失っています。そしてこのような現象は茨城各地で起こっていると考えられます。高校を卒業した若者が大学や仕事を求めて地元を離れていく。流れとしては当たり前なのかもしれませんが、このことをとても寂しく感じます。都会の方が住みやすく、人が集まるのは仕方のないことですが、下妻の良さも十分に知っている私にとって都市とそれ以外の街の差別化が進むことにあまり気が進みません。だから、地方の地域を都市のように盛り上げるのではなく、地方だけにしかない良さをアピールして人が集まるようになればいいなと思います。それが茨城全体としてのこれからの在り方であり、それが達成されれば茨城の隠された魅力がもつと他県に伝わると思います。

そして、私は行政書士になりたいと考えています。地元の人と触れ合いながら相談に乗ったり、行政書士にしかできない書類の作成という仕事にとっても魅力を感じたからです。そのためには、大学で法学を学ばなければいけません。下妻へ通う条件として「国公立大学合格」が与えられた私にとって大学で法学を学ぶようになるのはとても大変ですが、目標に向かって勉学に励みたいと思います。そして将来、社会の中で働いていく際には下妻と守谷から学んだことを生かしていきたいです。



まもっていくよ、わたしのおてら

結城市立結城小学校 一年 清 しみず 水 みづ 野 の 乃 の 花 か

わたしは、いばらきけんゆうきしのおてらにすんでいます。おてらのなまえは、ぐぎようじです。なつやすみに、おてらのおてつたいをしました。わたしは、おとうさんといっしょにおきようをあげました。たくさんのおてらにきてくれて、うれしかったです。

おてらのなかにはひろいので、かくれんぼができます。かくれるばしょがたくさんあるので、なかなかみつかりません。はるには、けいだいにさくらがたくさんさきます。さくらははなびらをふえにして、ピーツとならしてあそびます。なつには、かぶとむしがでてきます。あさおきると、せみがみんないないいます。あきには、おはかのいちようのはっぱがきいろくなります。ふゆにゆきがふるとほんどうのやねにゆきがたくさんつもります。ゆきのけしきは、きれいです。

どようびに、あさがゆのかいをやっています。あさがゆのかいでは、きてくれたひととあさがゆのかいをたべます。わたしは、みんなといっしょにおつゆをのむのがだいすきです。すこしはすかしいけれど、おはなしをするのもたのしいです。

おとうさんから、「むじなきょう」というはなしをききました。ふしぎなはなしです。むじながかいたおきようをみる

と、めがつぶれてしまうそうです。だれもみたことがありません。

わたしのおじいちゃんが、おてらのじゆうしよくさんです。いちばんはじめからかぞえると、六十ばんめのじゆうしよくさんです。わたしは、「いままでずつとおぼうさんがおてらをつづけてきてすごいな。」と、おもいました。おてらがなくならなくて、よかったです。わたしは、これからもかぞくといっしょに、おてらをまもっていききたいです。

うちゅうとつくばとぼくのゆめ

つくば市立春日小学校 一年 木 き 村 むら 太 たい 河 が

ぼくは、しゅうらいつくばにロケットはつしやきちができてほしいとおもいます。ロケットがとぶところを見ると、むねがワクワクドキドキするからです。とても、ゆめがあるとおもいます。せかいじゅうの人たちが、つくばにいてみたいとおもうまちになってほしいです。いま、つくばには、ジャクサがあります。まだロケットはつしやきちはありません。ロケットはつしやきちがジャクサのちかくにできると、うちゅうにいくくんれんをして、すぐにロケットにのることができるようになるとおもいます。

ぼくのしゅうらいのゆめはうちゅうひこうしになることです。つくばのジャクサでくんれんをして、つくばのロケットはつしやきちからうちゅうへとびたち、せかいではじめて火せいをあるきたいとおもいます。火せいでいろんなけんきゆ

うをして火せいステーションをつくり、うちゅうひこうしではない人たちも火せいにこられるようにしたいです。いもうとやともだちといっしょにみんなで火せいにいったらさいこのきぶんになります。ぼくは、そのうちゅうせんのパイロットになって、みんなを火せいにつれていきたいです。みらいのつくばは、うちゅうりょこうにいく人たちがせかいじゅうからあつまるりっぱなまちになってほしいです。ぼくは、りっぱなうちゅうひこうしになって、みんなをよろこばせたいです。

ほたるがみたい

利根町立文小学校 一年 小 林 嘉 人
こ ばやし よし と

ぼくは、ほたるをみたことがないです。ずかんやテレビをみていて、きれいだったのですが、よくわからなかったので、おとうさんにきいてみました。むかしは田んぼのあぜみちをあるいていて、ほたるがいて、いねのあちらこちらにとまっていて、とんでいるほたるもいて、それはすごかったみたいです。それがいつのまにかいなくなってしまうのです。

それは、こうじょうをつくって、ものをつくったりしてきた水や、人がいっぱいすむようになって、せんとくをしたときにでる水がきたないので、それがよくないといっています。じどうしゃがたたくさんはしっているのもよくないらしいです。きたないはいきガスをだすので、くうきにもよくない

いと、おとうさんがおしえてくれました。

ぼくのうちのまわりでは、きたないはいきガスをだすじどうしゃがすくなくなってきたので、くうきはこれからきれいになるとおもいます。

こうじょうはまだみたことがないので、どうなっているかわからないのですが、きたない水がどうしてでてくるのかをみてみたいです。

ぼくができることは、なるべくきたない水をださないことです。それが、それはあさかおをあらったり、手をあらうときに、たたくさん水をつかわないようにしたりすることです。

水とくうきがいつかきれいになれば、いえのちかくの田んぼでたたくさんのほたるをみることもできるはずです。はやくみてみたいです。

ほたるがたたくさんみられる、くうきと水のきれいないばらきけんになるといいなとおもいます。

いつまでもかわらないきずな

古河市立古河第五小学校 二年 剣 持 楽 育
けんもち ら いく

きよ年の四月に、ぼくの大すきなおばあちゃんがしんでしまいました。

ぼくは八人がぞくでした。かぞくはいつまでもかわらないものだとおもっていました。

でも、おばあちゃんがしんでしまってから、ぼくは、人のいのちは、いつまでもつづくものではなくて、どんなに生き

たいとおもってもしんでしまうもののだとしりました。

いつもぼくたちきょうだいのそばで、やさしくわらってめんどろを見てくれたおばあちゃんがしんでしまった時は、かなしくて、さびしくて、あいたい気持ちでいっぱいだったけれど、日がたつにつれて、だんだんと、そんな気持ちだけではなく、おばあちゃんがいなくなったことで、ぼくたちに、おばあちゃんは、人のいのちの大せつさをおしえてくれたのではないかとおもうようになりました。

じしんのように、とつぜんのできごとで、しんでしまう人や、おばあちゃんのように、びょう気でしんでしまう人、りゆうはいろいろだけど、もうあえなくなってしまうということは同じです。

それなら、生きているうちに大せつに楽しくすごしていくべきだとおもいました。

今、ぼくは、七人がぞくになつてしまいました。おばあちゃんはずっと、のこされたかぞくで、おたがいをおもいあつて、まい日楽しく生かすしていくことの大せつさをおしえてくれたのかもしれない。

今までは、小さかったぼくをかぞくみんながまもってくれたけれど、これからは、ぼくもこのかぞくの一人として、いもうとや、年とつていくおじいちゃんをまもつてあげてねとおばあちゃんにたのまれた気がします。

今は天国にいるおばあちゃんも、ぼくたちの心の中でちゃんと生きつづけています。

かぞくのきずなをありがとうおばあちゃん。

わたしのゆめ

水戸市立上大野小学校 二年 梅 沢 優 夏

わたしは、いばらきけんちようがある、水戸市立上大野小学校に通っています。わたしたちの小学校のまわりは、しぜんにかこまれています。

今年の春には、学校のプランターの花の間に、「はくせきれい」という水戸の鳥が、すをつくり五つのたまごを生んだので、みんなでかんさつをしました。ひながかえり、大きくなって、夏休み前には、わたしたちがべん強している時に、親鳥に教わりながらとびかたのべん強をしていました。

わたしのいえのとなりは、「なか川」がながれています。田んぼもたくさんあります。川とわたしのいえの間の草むらには、タヌキフアミリーがすんでいます。きのうも子タヌキが「クーンクーン」となっていました。

にわには、まい朝キジがあそびにきます。土の中には、もぐらがすんでいます。カニやカメラもあそびにきたことがあります。そのほかに、たくさん生きものがすんでいます。

水戸市は、「けんちようしよぎいち」とおかあさんに教えてもらいました。「けんちようしよぎいち」は、いばらきけんのいろいろなことを中心になるところですが、わたしのすんでいる上大野ちくのように、たくさんしぜんがあります。

わたしが大人になって、おかあさんになった時に、子どもたちにも、今わたしが見ているタヌキやキジなど、たくさん生きものを見せてあげたいです。それがわたしのゆめです。

いばらきが、ずっとそんなすてきなままでいられるように、しぜんをまもっていきたいです。

ぼくがしようらいなりたいたいこと

八千代町立中結城小学校 二年 安田 渚

しようらいなりたいたいことは、パンやさんです。ぼくが、パンやさんになりたいうちは、いろいろなパンを作りたいからです。作ってみたいパンは、いばらきけんのとくさんぶつをつかったパンを作りたいです。とつてもあまりメロンをつかったメロンパンを作りたいです。とつてもあまくて、ほつぺたがおちるようなパンのなまえを、「あまーいところけるメロンパン」にします。つぎに、ほくほくのかぼちゃをつかった、かぼちゃあんパンを作りたいです。ほくほくのかぼちゃをつかって作ったパンなので、たべた人の気もちをほくほくあつたかくしてくれます。そんなかぼちゃあんパンのなまえを、「ほんわかあまいかぼちゃパン」にします。パンをつくるときには、力いっぱいいきじをこねて、ふわふわのパンきじをつくります。たべた人のかおがしあわせいっぱいになるようなパンをつくりたいです。うまくやけるように、「おいしくなあれ、おいしくなあれ。」と、となえながら、気もちをこめてやきます。いつかほんとうに、おいしいパンをやけるパンやさんになりたいです。

いばらきの未来、ぼくのゆめ

古河市立仁連小学校 三年 荒井 徹

「徹ちゃん、ご先ぞさまをせなかにせおつてきてね。重いから、たいへんだよ。」

おぼんの時、おはかに行く前に、おばあちゃんから、大切なことをたのまれたぼく。おばあちゃんの話によると、ぼくの家は、えどじだだから、ずっとここにいたみたいだ。だから、ごせんぞさまがたくさんいる。あととりのぼくは、ちようちんを持ってむかえに行く。たいへんな仕事だ。

ぼくのゆめは、まだ決まっていな。正直まよつてる。けれど、お父さんのように、仁連下町にずっといたい。ぼくが、学校から帰るとちゆう、近所のおじいちゃんやおばあちゃん達に会う時がある。すると、かならず、「徹ちゃんは、正や君にっているねえ。徹ちゃんが、まい子になつても、たばこ屋の荒井さんの家だつて、すぐ分かるよ。」と言われる。

ちよつぴりはずかしいけれど、ぼくは、うれしい。だつて、近所の人、みんな知りあいだから。

だから、おぼんの時、ご先ぞさまをおはかまでむかえに行つたり、おくつたりするのはへっちゃらだ。お父さんも、子どものころ、やっていたとおばあちゃんが言っていたもん。

お父さんの子どものころとくらべると、今は新しい道ができて、たくさんの車が走っている。新しい道のおかげで、習いごとのお習字教室にも早くいける。おいしゃさんにもパン

屋さんにもあつという間にいける。

ぼくが、お父さんぐらいになった時、どうなっているだろう。海までいくのに、あつという間についていちゃ新しい道ができるかな。その近くには、大好きなレストランがたくさんできるとうれいな。よく行く図書館も、もつともつと大きくなって、いろいろの本があるといいな。ぼくが自分の子どもをつれて本をかりるんだ。そしてぼくの子どもも、ぼくと同じように仁連下町が好きだといいな。

大すきなふるさと

桜川市立真壁小学校 三年 西^{にし}村^{むら}奈^な緒^お

「ああ、おいしい。」

「何が？」

「空気！」

三年前、わたしがさげんだ言葉だ。お父さんの仕事で三年間マニラにすんで、やつといばらきに帰ってきた時、一番に感じたことだ。

「田んぼいつてくる。」

それから毎日、わたしは、あみとバケツを持って田んぼに行く。さかを下りるとドングリの森の間から田んぼが見えてくる。海みたいにあちからこちまでぜーんぶ田んぼ。今の田んぼは、水が少なく、大きな真つ赤なざりがにがいっぱい出てきてる。

「なおちゃん、ざりがにとつてよ。くきを切られちゃうんだ

よ。」

田んぼさんが言ってるから、いっしょうけんめいざりがにをとる。たいりよう。

「またこんなにとつてきて〜。」

ママに言われても気にしない。だって田んぼさんのためだもん。

わたしは、田んぼとつくば山の見える風けいが大すき。毎日いっついても田んぼと山はどんな色かわわっていく。

春は、田んぼに水がはってピッカピカのがみになる。そこにピンクやむらさき色の山や雲がうつってまちがいさがしの絵みたいだ。夏は、緑一色。カエルたちは、いねが元気に育つようにがんばれがんばれ大がっしょう。秋は、いなほが金色にかがやく太ようみたい。山も赤や黄色になっておしゃれに大へんしん。虫たちもいとお米ができた、できたとおまつりだ。冬の田んぼはねむってる。わたしだけ元気にたこ揚げする。

つくば山と田んぼは、わたしも家ぞくも大すきなふるさと いばらきのけしき。これからもずっとこのけしきを大切にしたい。そして、わたしがお母さんになったらわたしの子どもたちもこの田んぼにつれてきたいな。

実りゆたかないばらぎの農ぎよう

常総市立石下小学校 三年 高橋紅愛

私がすんでいる所は、自ぜんゆたかで、おいしい野さいやくだ物がたくさん作られています。わたしのそ父母は農家で、お米、色いろな野さい、たくさんをなしを作っています。私は、そ父の作るなしが大きいです。そのなしが、どのようにして作られているのか気になったので、教えてもらいました。

なしは、なえ木をうえてから、きちんとした実になるまでに十年くらいかかるそうです。

春に花がさいてきたら、花をとるための木が何本かあるの、その木から花をつみます。つんだ花をだっこくし、かんそうさせて花ふんをとります。その花ふんを、一つずつ花につける花合わせをします。ちがうしゆるいのなしの花ふんをつけるのがポイントです。なしの花は、一週間から十日くらいしかさいていないので、早めに作ぎようしなくてはなりません。ほかに、ふようなつぼみを落とすてきらい、ふような実を落とすてきかもします。

なしのしゆるいによつて、出来る時きがちがい、八月から九月まつごろまでしゅうかくをします。一番大へんなのがこの時きです。今年のように、花がさく時きにしもがふつたり、ひようがふつたりすると、実の形が悪くなつたり、きずができたりして出かが出来なくなつてしまふそうです。

そのほかに、ひりようをまいたり、しょうどくをしたり、

草かりをしたり、冬にはよ分なえだを切つてととのえる、せんだ作ぎようなどもします。

こうした作ぎようをへて、丸一年かけてなしがそだつそうです。作物を作るには、たくさんの手間や時間がかかり、とても大へんな事なんだと分かりました。このように大切にそだてられた作物が、たくさんの人によるこんで食べてもらえるとうれしいです。農ぎようを通じて、私の大すきないばらぎを、たくさんの人たちに知ってもらいたいと思います。

塙家住宅を調べて

笠間市立岩間第一小学校 三年 手島涼香

「えー!! 人のお家なの。」

わたしは、上安居にある塙家住宅に、たまをちゃんとわたしで、調べ学習に、行きました。あたご神社や合気神社もあつたけど、行ったことがある所ばかりだったから、行ったことがない塙家住宅を調べる事にしました。

とてもあついい日に行きました。塙家住宅は、塙さんのお家だそうです。入口には、約二六〇年前のものとか、いろいろなことが書いてありました。でも、わたしは、よくわかりませんでした。塙家住宅のげんかんをあけると、中は、暗くてひんやりして、ざしきわらしがでそうでした。わたしの家とは、全然ちがいました。かべは、土と竹でできていて、屋根は、かやという草でできてました。草なのに、何十にもなっているから、あまもりは、しないと教えてくれました。台所

のゆかは土で、おふろとトイレは、外でした。

「でんきは？」

と聞くと、

「ないよ、むかしは、ロウソクだよ。」

とおどろくことでいっぱいでした。

一番おどろいたのは、家の中で馬の部屋があつたことです。いっしょにいてくさくないのかなと思いました。

「えー本当に。」

と、言うとき塙さんは、

「馬は、とつても大事なんだよ。馬がいないと、畑や田んぼができないから、食べ物が作れなくなってしまうんだよ。」
と言っていました。むかしは、馬は、家族と同じように大切にされていた事が分かりました。今は、馬にのせてもらつたのしいけど、むかしの馬は、はたらきものでえらいな一と思ひました。わたしは、大へんだけどもかしの生活を体けんしてみたいと思ひました。

塙さんには、このお家をずっとまもつてほしいと思ひました。

地いきのきずな

ひたちなか市立中根小学校

四年

北

彩

乃

わたしは、東日本大しんさいを小学一年生のときに、けい験しました。

地しんの時は、まだ、小学校にいてこわくて泣いてしま

ました。お母さんにむかえに来てもらい、家に帰つたら家中はお皿がわれたり、屋根のかわらがずれていたり、お水も出なくて、電気もつかえなくなっていました。わたしは、「これからどうなるんだろう。」と心配でたまりませんでした。その日の夜から、かい中電灯をつけてねむりましたが、地しんと暗いので、とつてもこわかつたです。

次の日には、お母さんの友達から、

「井戸水をくみにおいで。」

と声をかけてもらい、大きなポリタンクやペットボトルをいくつも持つて、毎日、水くみに行きました。

また、おとなりの家からは、からあげが買えたからと、分けてくれたり、パンを分けてあげたりしました。わたしが、小さかつたので、おかしやジュースもくれました。

何日かすると、近所の人が発電機を、

「二軒で使つて。」

と持つてきてくれました。長い電気コードを使つて、おとなりの家とつないで使ひました。その夜から、少しの間だけわたしの家とおとなりの家に明かりがつくようになりました。わたしは、その時にこわかつた気もちが、すこしほつとしました。

いつも、あいさつしかしたことのない、近所のおじさんやおばさんたちの、やさしさが、とてもうれしく思ひました。そして、こまつた時に協力して明るくすごせたのがすごいと思ひました。ちよつとこわいと思つていたお兄さんたちと、いっしょに水くみなどをして、やさしい人なんだと、気づくこともできました。

四年生になった今は、地しんの時に助けてくれた近所のおじさんやおばさんたちにあまりあうことがなくなってしまうましたが、登校や下校の途中で会った時は、その時のありがとうの思いをわすれずに、元気にあいさつできるようにながらばっています。そして地いきのごみひろいやイベントなどにも、参加するようになりました。

こまった時に助けあうのが地いきのきずななんだと思います。

なくならないで地いきの行事

筑西市立五所小学校 四年 大山 喜

ぼくの住んでいる地いきでは、夏には「夏祭り」と「五所音頭大会」があり、冬には「どんどやき」という地いきの人たちで行う行事があります。

夏祭りは、昔からある大きなおみこしを、お父さんたちと近くの神社までかつぎます。とても重くて大変だけど、みんながんばります。お母さんたちは、たくさんのおにぎりを作って、近所の家配ります。みんなそのおにぎりをとって、お楽しみしています。ぼくもお母さんたちのおにぎりが大好きです。神社におみこしをしまうと児童館に集まって、みんなでおみこしを食べます。ぼくは、みんなで食べるこの時間がとても好きです。

五所音頭大会は、地いきの人がたくさんぼくの通う小学校に集まって、地区ごとにおどりをきそい合います。おどりの

まとまり、ふんいき、はば広い年れいそうのさんかなどでしんさするそうです。この五所音頭は、保育園や小学校の運動会で、毎年お母さんたちとおどるのでとくいです。今年も、ぼくの住んでいる地区がゆうしようして、とてもうれしかったです。

冬に行われるのが「どんどやき」です。お父さんたちが、竹やお正月のかざりなどで作ったやぐらに火をつけて、お母さんたちが作った赤と白のおもちを長い竹にさして、その火でやいて食べます。たまに、お父さんが失敗してこがしてしまふけど、とってもおいしいです。この火にあたると一年間病気をしないで元気でいられるそうなので、あつくて少しこわいけどお父さんと近くに行ってみます。

このような地いきの人たちと協力して行われる行事が、ぼくは大好きです。それは、みんなが仲良く楽しそうだからです。お父さんやお母さんもみんなでお酒を飲んで楽しそうだし、ぼくも友だちと一日中いっしょにいられて楽しいです。近所のおじさんやおばさんと話をするのも楽しいです。たまに調子に乗りすぎて注意される事もあるけど、たくさんの人たちがみんな家族になったみたいでとてもうれしい気持ちになります。

ぼくが大人になってもこの行事が続いてほしいと思います。そして、ぼくの子どもがぼくと同じ思い出がくれたらいいなと思います。

未来のために、今ぼくができること

常総市立石下小学校 四年 岡^{おか}田^だ和^{かず}希^き

ぼくのおばあちゃんは、いばらき県のちく西市というところに住んでいます。市町村が合peiする関じょう町という小さな町でした。なし畑がたくさんあり、夏にはあまくておいしいなしがたくさん取れます。ぼくも四さいまではちく西市に住んでいました。自ぜんがたくさんあって、ぼくは大好きな場所です。

おばあちゃんの家に遊びに行くと、ぼくはいつもおばあちゃんと犬のマロンの散歩に行きます。大きな道はあぶないので細い道を通って、十分くらいかかる小学校まで歩きます。その中には小さな川が流れています。木のえだや川のはじめのほうにごみがたくさん引つかかっています。とてもきたない川です。でも、おばあちゃんが子どものころは、この川はとてもきれいで、魚が泳いでいて夏にはホタルもいたそうです。川の近くにはシロツメクサが生えていて、おばあちゃんが友達とかんむりを作ったり、川で水遊びをしたり魚をつかまえたりしたそうです。ぼくは、おばあちゃんの話聞いて、ぼくも昔みたいなきれいな川で遊んでみたかったなあと思います。

ぼくは、なぜ川がよごれてしまったのかを考えてみました。ぼくは、ごみ箱以外にごみを捨てる人がいるからだと思います。前にお母さんと出かけた時に、車のまどから道路にごみやたばこのすいがらを捨てる人を見ました。川に直せ

つごみを捨てなくても、風で飛ばされて川に入ってしまったこともあると思います。おばあちゃんは、ぼくたちの家から出る油やせんざいでよごれた水が川を流れて川をよごしてしまうということをお母さんに教えてくれました。それを聞いて、ぼくも知らない間に川をよごしていたんだなあと思いました。

今はおばあちゃんが子どもだったころとくらべて、生活は便利になり、おもちゃや食べ物もたくさんあるけど、川はよごれて自ぜんも少なくなってしまうました。ぼくは、今と昔のどちらが良いか聞かれたら、どちらも選べません。だから、ぼくは、未来に今と昔の良いところをのこしたいと思います。そのためにもぼくは、良いことと悪いことの区別ができる大人になりたいと思います。これからは、かんきょうのことを考えて、自ぜんをよごすようなことはしないようにして、悪いことをしている人にはきちんと言いたいと思います。そして、ぼくがお父さんになるころには、また魚が泳げるようなきれいな川になっていたらいいなあと思います。

茨城県の空港と港の未来

守谷市立松ヶ丘小学校 四年 井^い出^で大^{だい}地^ち

ぼくは、茨城空港の見学に何回か行ったことがあります。が、空港にいる人が少ないと思いました。

飛行機の数も、決まっています。行き先も決まっています。利用する人はこれからもあまりふえないと思います。

羽田空港、成田空港などは電車で行くことができますが、

茨城空港は電車で行くことができません。

もし、茨城空港へ電車で行くことができたとしても便利になると思います。つくばエクスプレスはスピードが早いのでつくばエクスプレスを茨城空港までつなげてほしいと思います。

そうすれば、茨城空港の周りをもっとにぎやかになると思っています。

また、茨城空港のてんぼうデッキのフェンスにあるガラスは、左側が見えない様になっていて、かつ走路全体を見るのができません。

これはかつ走路の近くにじえいたいとき地があるからだろうです。

何とか、かつ走路全体を見ることができるようにしてほしいと思います。

それから、茨城県には、大洗港という大きな港があります。大洗港の近くの海岸には、毎年の様に海水よくに行つていきます。

つくばエクスプレスを大洗港までのぼすと海水よくなどにもかんとんに行けるようになり、さらに便利になるのでうれしいです。

大洗港からはフェリーで北海道まで行くことができます。

ぼくは、北海道が大好きなので、いつかつくばエクスプレスで大洗港へ行き、大洗港からフェリーで北海道へ。そして北海道から飛行機で茨城空港へ。茨城空港からつくばエクスプレスでぼくの住んでいる守谷にもどって行くことができたらとてもうれしいです。

電車で空港や、港に行くことができたなら、車がなくても、いろいろな場所に行くことができ、茨城県がとても便利な県になると思います。

ぼくは、つくばエクスプレスと空港が好きなので、しょう来はつくばエクスプレスにのって茨城空港で働きたいです。そのためにもっと茨城のことをべんきょうしようと思います。

ぼくが、大人になるまでに、つくばエクスプレスが茨城空港までつながつていればいいと思います。

みんなのきずなと助け合いの心

水戸市立梅が丘小学校 五年 但野佳澄

東日本大震災から三年がたちました。

東日本大震災では、茨城県でも津波や家屋のとうかいなどたくさんひ害を受けました。

私の家でも、お皿がわれたり、本だながたおれたりしました。とてもこわかったことを今でもおぼえています。

その日の夜は、電気も水も使えませんでした。

でも、私の家にはまきストーブがあります。

なので、部屋をあたたくしたり、ご飯を作ったりできました。当時は寒かったので、お母さんやお父さんが近所の人を集めて、あたたまってもらえるようにしました。

夜は、みんなで私の家でご飯を作り、みんなでご飯を食べる助け合いました。

次の日は、電気は使えるようになりましたが、水はまだ使えなかったで、その日も、みんな私の家に集まりました。

電気が使えるようになったので、私はテレビをつけました。すると、どの番組をかけても波で家や人、車が流されているえいぞうがながれていました。

私は、テレビの中で、何がおこっているのか分からなかったけど、とにかくこわかったのはおぼえています。

水はまだ使えなかったで、近所の友達と私と弟でまだ水が残っていた学校に、バケツをもって行きました。

水道の前にはとても長い列ができていました。私はならぶのがいやになりそうでした。

ならんでいると前のおばさんが、

「前に入れてあげますよ。」

と言ってくれました。

でも、私たちは、

「だいじょうぶです。」

といいました。それでもおばさんがいれてくれるというので、もうしわけない気持ちでいっぱいになりながら、私たちはならびました。私たちは、水をくむことができましたが、うしろの列の人たちは、学校の水も、なくなっていました、くむことができていませんでした。私たちは、あのおばさんのおかげで水をくむことができたのかなと思いました。今では、もっとみんなが水をくめるようにできるほうほうをもっと考えればよかったと思うようになりました。

あの日、私たちには多くの助け合いの心ときずなが生まれたいと思います。三年前の東日本大震災で、たくさんの事を学

ぶことができました。

また、三月十一日に亡くなったたくさんの人たちのためにも、助け合って生活していきたいと思いました。

十年後の茨城

水戸市立吉沢小学校 五年 村井 あり お

私は夏休みに、ある本に出会いました。それは「犬たちをおくる日」という本で、動物愛護センターで働く人達や、そこに収容されている犬たちのことが、かかれていました。その内容は、とてもつらいものでした。

そんな時、笠間市にも同じようなし設があると知り、見学させてもらうことにしました。動物指どうセンターに行くのと、職員の方から色々な事を教えてもらいました。犬は暑さに弱く、日かげをつくらないと熱中しようになってしまうことや、人間と犬は体の中の構造が同じということ、小さい犬のほうが大きい犬より長生きするということなど、とても勉強になりました。

しかし、とてもしょうげきだったことが二つありました。

一つ目は、茨城県が犬やねこの殺処分頭数がワースト一ということです。昨年センターで犬三一七頭、ねこ三一九七頭が一年間で殺処分されました。私はおどろきとショックとでむねが苦しくなりました。ここに収容されている犬達は、ほとんどがかい主にすてられてしまったり、放しがいにして

いて、そのまま迷い犬になってしまった犬達です。

犬やねこにも、私達人間と同じ大切な命があるのに、かい主はあきてしまったとか、散歩が面倒などの理由で、かん単にすててしまうなんて信じられません。生き物をかう資格がないと思います。

二つ目は、実際に犬達の収容室に入った時です。犬達は、じつと私達の方を見ていて、「ぼくはここにいるから、助けて。早くむかえにきて。」と、うったえているように見えませんでした。むねがはりさけそうなほどつらかったです。

私も犬が大好きで、いつも犬がほしいと思っていました。でも、お父さんとお母さんに「かわいいと思うだけでは、生き物はいかえないよ。」と言われてしまいます。お父さんやお母さんだって、子供のころに鳥や犬をかっていたのに、ズルイといつも思っていました。でも、今回センターを実際に見学して、お父さんとお母さんの言った意味がやっと分かりました。犬をかうということは、一生その犬を幸せにして、自分が責任を持ち家族の一員としてかうということなのです。

十年後の茨城は、殺処分頭数ワースト一からぬけだしてほしいです。今はまだ、動物指どうセンターや動物愛護ボランティアの方の活動を知らない人も多いと思うけれど、多くの人に知ってもらいこの現状を知ってもらいたいのです。

そして、県民全員が「命」の重みを感じ大切にしてほしいと思います。人間も動物も暮らしやすい幸せな社会になってほしいです。

私もいつか自分で責任を持てるようになったら、犬をかい家族の一員にむかえたいです。

大切な茨城

銚田市立新宮小学校 五年 一ふた 川かわ 杏あん 樹じゅ

私が二年生のときにおきた東日本大震災。あの時のことは一生忘れられません。岩手、宮城、福島は大変大きな被害を受けました。津波が来て家や船が流され、たくさんの方の命がうばわれました。私が住んでいる銚田市も多くの被害を受けました。

学校で帰りの会をしていた時に、いきなりゴゴゴという大きな地震がありました。地震が少しおさまって校庭にひなると、地面にぽっかりと大きな穴があいていました。いつもの帰り道は、地面が割れ、へいがたおれ、ほとんどの家の屋根のかわらが落ちていました。

建設業をいとなんでいる私の父は、震災後毎日休まず、こわれた家のほしゅう工事や水道のふっ旧工事をがんばっていました。雨の中でもぬれながら仕事を続けました。原発事故の直後は放射線量の情報がわからず、雨に放射線がふくまれているのかもしれないと考えると、父のことが心配でした。私が父を心配して、

「雨にぬれてもだいじょうぶなの。」

とたずねると、父は、

「大丈夫だよ。」

と笑顔で答えてくれました。そんな父の姿を見て父だけではなく、日本中の方がみんな、震災に負けずにがんばっているんだと思いました。ふっ旧工事をしている時に、通りかかっ

たおばあさんが、
「おたがいにひ災者なのにお仕事ご苦労さま。がんばってください。」

と声をかけてくれたそうです。その言葉がとても心にひびいて力がわいてきたと父から聞きました。そのおばあさんのような一人ひとりの思いやりの心が茨城の支えになってきたのではないかと思いました。ふるさとを守りたいという思いが茨城をきゆう地から救ったのです。

私は震災の経験を通して、震災でつらい思いをした人がたくさんいたこと、そして今も仮設住宅などで大変な思いをしている方々がいること、震災に負けずに人々が力を合わせて復興しようががんばってきたこと、人の絆が大きな力になることを決して忘れないようにしたいと思います。そして、人のために役に立っている人になり、私が生まれ育った大好きな茨城をこれからも、みんなで力を合わせて守り、大切にしていきたいと思っています。

将来のぼくと未来の茨城

古河市立中央小学校

六年

すぎ 杉
もり 森
まさ 優
たか 喬

人には色々な悩みや苦手なことがたくさんあります。

ぼくはみんなと同じ給食が食べたいのだけれど、お医者さんから食べてはいけないと言われている食べ物があります。それは、アナフィラキシーショックを起こすと苦しくなって死んでしまうと言われている「ピーナッツ」と「そば」です。

給食のこん立ての中で一番つらいメニューは、大好きな「カレーライス」です。なぜかと言うと、カレーのルーの中に材料としてピーナッツが使われているからです。

給食センターの人達がカレーのルーの中にピーナッツを使っていない物で作ってくれば問題ないけれど、ぼくひとりのために材料を変えてもらおうわけにはいかなないので、給食がカレーの時は、毎回お母さんが手づくりで作ってくれるカレーを学校に持って行きます。お母さんのカレーはすぐおいしいけれど、クラスの中でひとりだけちがう物を食べているとみんなの視線が気になります。

最近のニュースでもチーズが入っている給食をまちがえて食べてしまい、亡くなった女の子がいました。

ぼくは将来そういうアレルギー体質をなくすための研究をし、薬を開発したいと思っています。

そのために毎年、夏休みになるとつくば市で開催されている「つくばちびっこ博士」に参加しています。

最初は、理科学研究所に行つて、研究しせつの見学や細胞と遺伝子についての実験をしてきました。一番おどろいたことは、心臓から細胞を取り出したことです。けんびきょうでのぞいてみるとドクンドクンと細胞が脈をうっていることにびっくりしました。

次に、アステラス製薬のつくば研究センターに行つて病院の原因となるウイルスをやっつける実験をしたり、薬の作り方などを勉強しました。新しい薬の作り方は、3Dメガネをかけてビデオでの説明でした。体の中の病気になっている部分に合うように色々な形のブロックを組み合わせて薬を作

り、ぴったりはまるようにするのが小さい時に遊んだ積木と同じようでおもしろかったです。

このように茨城県には、昨年、iPS細胞でノーベル賞を受賞した山中教授みたいな研究ができるような、大学や研究所がたくさんあるので自分もノーベル賞をもらえるような科学者になって、茨城の未来で役立てる人になりたいと思います。

未来・ずっとあつてほしい場所

筑西市立五所小学校 六年 木村梨那

私は、お盆にいとこが来て、茨城県ひたちなか市に、新しく大型の商業施設ができたと聞いて、行ってみたいと思いました。健康な人は、好きなどころに行けるので、すごく楽しいと思います。私も、家族と旅行やお出かけに行くときと楽しく楽しいです。でも、なかには、体が不自由で一人暮らしをしている人、お年寄りの介護をしている家族の人たちもいます。そんな人たちのために、お店や福祉施設などを、増やしていく方が良いと思います。私の地域にも老人ホームがあります。そこで働いている人たちは、どんな時でもここにこ

ているので、お年寄りの人も喜ぶと思います。ですが、福祉施設だけを増やせば、便利になるのかと考えると、それはちがうと思います。お金や気持ちの面で、家で暮らしたい、と思う人もいます。なので、お年寄りや体が不自由な人たちが、無料で乗れるバスやタクシーを充実させた

り、近所の人々が時々、様子を見に行ったりする事も大切だと思います。

今私ができることは、近所の人たちのことを時々見に行く、困っている人がいたら、助けてあげる、重い荷物を持っている人を見かけたら、引き受ける、なやんでいる人がいたら、声をかけてあげる、物が足りなくて困っている人がいたら、わけてあげる、という思いやり算です。

新しく充実させたいものもありますが、このまま茨城に残しておきたいものもあります。それは、豊かな自然と、たくさんの特産物です。いとこの家はひたちなか市の海ぞいにあります。とまりに行った時、海で遊んで、とても楽しかったです。魚ももらって、家族で、

「おいしい。おいしい。」

と食べました。家族でつくば山に登ったこともあります。とても新鮮な空気で気持ち良かったです。茨城の特産物の中に私の大好きな梨があります。すごくあまくて、白い花もとてもきれいです。梨祭りも開きされています。私の住んでいる場所は、田んぼに囲まれていて、農業が多い地域です。私のおじいちゃん、おばあちゃんが作ってくれるお米やいちごは世界一おいしいです。それをずっと食べ続けたいです。

修学旅行で行った鎌倉、箱根や東京など、他の県もそれぞれ持ちようがあつて、おもしろいけれど、自分の地区に帰ってくると、なんだか、ホッとします。そんな所が気に入っています。ずっとそんな場所であつてほしいと願っています。

茨城イメージアップ大作戦

つくば市立春日小学校 六年 高野 紘輔

茨城県は海や山があつて、土地が広いので農業や水産業がとてまさかんです。特に農業は、ぼくの大好きなメロンやレンコンが生産量全国一位です。それなのに、都道府県みりよく度ランキングで全国ワースト二位だったことにとてもおどろきました。しかも、三年連続最下位の時もあったと聞き、さらにおどろきました。茨城県にはいいところがいっぱいあるのに、そのことが知られていないことは、とてももったいないことだと思います。また、茨城には空港もあるのに、飛行機の便数も少ないそうなので、あまり利用されていないので残念です。

そこでぼくが考えたのは、茨城県のみりよくを伝えることができるツアーをたくさんつくることです。まず、茨城空港を使って全国各地から家族連れに来てもらいます。次に、茨城の名産であるメロンの食べ放題を楽しんでもらったり、納豆工場の見学をしたり、レンコンのしゅうかく体験をします。そして次に、子どもたちに人気の大洗水族館に行きまます。最後にお魚市場によつて、新鮮な魚貝類を食べてもらったり、おみやげに魚を買ってもらいます。

また、時間があればつくば市まで来てもらい、JAXAやエキスポセンターの見学をしてもらうのも楽しいと思います。つくば山に登ってもらい、帰りはロープウェイに乗って風景を楽しんでもらうのもおすすすめです。

お年寄りの方には、水戸市のかいらく園で梅の花をみてもらったり、ふくろ田のたきをみに行ってもらうのもいいと思います。

また、茨城県は中学男子サッカー部員数が全国第一位だそうですね。ぼくも五才からサッカーを習いはじめて、来年はサッカー部に入ろうと思つています。茨城県にはJリーグにかしまアントラーズと水戸ホーリーホックというチームがあり、熱狂的なファンも多いです。そこで、茨城県民のサッカーファンに、もっとサッカー観戦をしてもらえるように、各地からスタジアムまでの直行バスをふやしてほしいです。そうすれば、試合後のスタジアム周辺のじゅうたいも減少すると思ひます。ぼくたちサッカー少年が試合をたくさん観に行けるようになるとうれしいです。

このように、たくさんのみりよくのあるぼくの大好きな茨城県を全国に伝えていけたらいいなと思ひます。そして、少しでもみりよく度ランキングの順位が上がってくれるととてもうれしいです。

田んぼの景色とおいしいご飯

筑西市立下館中学校 一年 宮本 桃果

私の祖父母は農業を営んでいます。私の通学路は田んぼと田んぼの間の農道で、毎朝自転車を通る時、田んぼからの風を感じてとても気持ちいいです。何も無い冬の景色から春になり田んぼに水が入ると、水面がキラキラと輝き、近くの山

が水面に映つてとてもきれいです。そして田植えが始まると、一気に生き物の息吹が感じられるようになります。蛙が鳴く季節になると、稲の背はぐんと伸びて青々とした田んぼがどこまでも繋がって見えます。朝いつも遠くに見える、ランドセルを背負い登校する小学生の列が隠れてしまうくらい大きく伸びます。そしてお盆になると、稲の穂先に実が入ってくるのが分かります。濃い緑色だった田んぼが、黄緑になり黄色に変わってくる頃には、穂先がどんどん重くなり稲が頭を下げてきます。二学期が始まって学校から西へ向かって家に帰る時、国道の信号を越えて農道へ入ると、大きな夕日に照らされて田んぼ一面が黄金に輝いて見える時間があります。私はこの眺めが一年で一番大好きな田んぼの景色です。風で穂と穂がぶつかり、カサカサッと音がします。稲は茶色くたわわと実り、もうすぐ稲刈りが始まります。

ふわふわ、ホワーンと湯気が立ち、いい匂い。食べるとほんのり甘くて、炊きたてはピッカピカに光っている新米。私は祖父母が作ってくれるこの新米が大好きです。

「いつもより少なめの水加減でおいしいご飯が炊けるんだよ。」

と、祖母が教えてくれました。新米は、梅干し一個でご飯一膳食べてしまうくらいおいしいです。二つ上の兄はいつもご飯をたくさん食べますが、新米の時は特に凄くて、熱いのに口の中にたくさんほおぼり、ハフハフさせながらも急いでお代わりをして、少しのおかずで大盛りご飯を何膳も食べてしまいます。

祖父母はどちらも七十歳を過ぎていますが、毎日ライスセ

ンターに通っています。タイムカードを押してから農作業に出ているようです。近所の農家が協同で農業を営み、お彼岸が過ぎるとすぐ苗床作りが始まり、田植えに向けてどんどん忙しくなっていくきます。農繁期になると、毎日日の出と共に家を出て働き、お昼に帰って来たと思うと休む間もなく、午後一時には出かけて行きます。日が暮れても帰って来ない時もあるのでそんな日は私がお米をといであげたりします。

「そんなに働いて疲れないの。」
と祖母に聞くと、

「くたびれてくたびれてどうにかなっちゃいそうだけどやる人がいないから仕方ないよ。」

と言いました。今農業をしている人達は、殆ど七十代で、後継者がいないそうです。

八月十六日、家族でお盆様を送りに田んぼの中にあるお墓に行った時、祖母が、

「今年は実の入りが早いな。」

と言っていました。猛暑で暑い日が続き、お米の成長が早くなってしまったそうで、稲刈りもいつもより早くなるようです。お米の品質が落ちてしまわないかどうか心配です。お米だけでなく、祖母が畑で作っているなすやピーマン、オクラなどの野菜も、この暑さでとんでもない大きさに成長してしまふのがあったり、逆にミニトマトは暑さに負けてシワシワにしておれてしまい、収穫できる実が少なかつたりと、気象によって作物に影響が出てきています。今年の夏は連日三十度

を超える暑さかと思えば、夕方にはもの凄い雨と雷で道路が冠水するほどで、まるで亜熱帯地方のスコールみたいだと思います。

私は将来、もっとお米や野菜の品種改良が進んだり、新しい品種のお米が開発されればいいなと思います。天候に左右されずに、冬でも収穫できるお米ができれば、祖父母のような農家はとても助かるし、それらが将来茨城の名産になればいいなと思います。

がんばっぺ茨城

笠間市立東中学校 一年 石^{いし}井^い真^ま美^み

東日本大震災で、茨城県は被災地となった。東北ほどの大きな被害は受けなかったが大洗の港や船は水びたしでポロポロ、県の文化財である地域の六角堂も津波で流されてしまった。福島原子力発電所からも被害を受けた。茨城県の特産物であるメロンや栗、アンコウは放射線の心配により売れなくなってしまった。

しかし、落ち込んでばかりはいられない。茨城県は「がんばっぺ茨城」をスローガンに復興を進めることにした。茨城県で生産したものを食べてもらおうとCMや広告で安全ということを証明した。そんな活動を重ねる中でようやく、売れゆきをとりもどしつつある。また、同じ被災地である福島の支援活動も行っている。妊産婦支援プロジェクトや子供たちの心のケアを始め、たくさんの方々の活動を団体や個人で行って

る。私の父は仕事で支援活動を行った。父は笠間の動物指導センターで働いている。そのため、震災で迷子になってしまったペットや被曝した可能性のある動物の保護、動物を亡くしてしまった人や仮設住宅でペットを手放すことになった人の相談を受けるといふ活動を行った。父の話では、福島の家や町はきれいに残っており、いかにも人が普通に生活しているような風景だったそうだ。家がなくなつたわけでもなく、町が消えたわけでもない。それなのにそこで暮らせないというのは、どれほど悲しくて、さみしいだろう。考えただけですらなくなる。今もそんな状況にある。その状況を支援することですら減つたら私はうれしい。もちろんこの支援は一時的なもので終わらないほしい。できれば再生に近づくにつれて支援する人が増えてほしいと思う。私はまだ中学生だが何かできることを考えて活動したい。募金や手紙など自分のできることはたくさんあるし、せめて同じくらいの子に力と勇気をあげたいと思うからだ。

父は七日間の活動を終え、その帰りに福島産の桃を買って戻ってきた。一番の心配は放射線量だった。しかし、売っていたものだから安全だろうと被災地のものを食べてみるのも支援活動の一つだと思つたから食べてみた。とてもおいしかった。作つた人の気持ちがあつてきた。福島では安全安心を証明しても風評被害により、全然売れないらしい。売れないために値段を下げて販売しているという話も聞いたことがある。私は茨城県だけが被害を受けているわけではないんだと改めて思つた。みんなそれぞれ苦しんでいる。そして本

当にこの苦しみが分かるのは同じ経験をした所だけだと思
う。だからこそ、被災地だからと弱々しく政府や他の県に頼
るばかりではなく手と手を取り合って自ら強い気持ちで復興
を進めるべきだと思う。

今、茨城県ではボロボロだった港や船の整理がつき、仕事
が再開されている。有名な六角堂も新しく建て直し、新しい
歴史が幕を開けた。少しずつではあるがもとの姿に戻りつつ
ある。しかし、放射線がもれだした海や町の再生には時間が
かかっている。

「つらいときこそ笑顔でね。」

これは私の好きな言葉の一つである。この言葉を私はみん
なに伝えたいと思う。落ちこんでいたって、悩んでいたって
暗くなるだけだ。事実は変わらない。でも、笑顔をつくり、
今を一生懸命生きればきつと明るくなる。未来は輝く。暗い
町や未来を誰も望んではないはずだ。ふるさとが暗いのでは
いやだ。未来が輝いていないのではいやだ。近所を散歩すれ
ば笑顔であいさつしてくれる。楽しく明日の話ができる。そ
んな町にしたい。小さな心がけでもみんなやれば大きなこ
とになる。そんなことをたくさんやりたい。そしてどんだん
みんなの笑顔を増やしたい。明るく元気に復活し、同じ被災
地である東北に手を貸していこう。そしてみんなで心から笑
顔になれる日までがんばらばっぺ茨城。

茨城つてすごい！

つくば市立竹園東中学校 二年 江^え角^{すみ} 愛^{あい}

「あ、ナダレンジャーが出てる！」

八月二十六日の朝、NHKのテレビ番組に、防災科学研究
所の名物博士、ナダレンジャーこと、納口泰明さんが出演さ
れていた。ナダレンジャーといえば、つくば市で毎年夏に開
かれていくちびっ子博士の研究所公開で、雪崩や地震などの
自然災害について、おもしろおかしく教えてくれる人気解説
者である。私も幼稚園に入る前から小学六年生まで、夏休み
になると毎年、ナダレンジャーの解説ショーを聞きに行つて
いた。小さい頃からおなじみのナダレンジャーが、全国放送
の番組に出ているのを見て、とても嬉しかった。

番組の中で、ナダレンジャーこと納口さんは、地震の際に
起こる液状化現象について、「エッキー」を使って説明してい
た。「エッキー」とは、中に砂と水、カラフルな画びょうや
ビーズなどを入れたペットボトルのことである。エッキーを
逆さにし、静かに砂が沈殿するのを待ったら、ペットボトル
を爪で軽くはじく。すると砂に埋もれていた画びょうやビー
ズがポコッと顔を出す。砂が地盤、画びょうが地下に埋もれ
ているマンホールや水道管、爪ではじく衝撃を地震に置きか
えると、地震の後、地面からマンホールが突き出す等の災害
をもたらす液状化現象も、一目で理解することができる。私
には、もう見飽きた感さえあるエッキーでの実験に、出演者
の人達は皆一様に、驚きの声を上げていた。

その、驚き感嘆する出演者達の反応を見て、数日前に、徳島から我が家に初めて泊まりに来ていたところを、JAXA等、近隣の研究所に案内した時の事を思い出した。宇宙兄弟に出てくる場面そのままに、JAXAのロゴが付いた建物やロケット、呼ぶと返事をしたり、まばたきをして首をかしげたりするアザラシのペットロボット「パロ」を見て、「すごいな、茨城は。こんな近くに研究所がたくさんあって。最先端のものを、いつも間近に見られていいなあ。」と、いとこが言った。

私は、その言葉にはっとした。私にとっては、ごく当たり前だと思っていたこの茨城での生活や環境が、実はとても恵まれたものであったことに気付いたからだ。私の住んでいるつくば市をはじめ、茨城県には、様々な分野の研究所が数多くあり、一般公開日などを設けて、見学者に実験施設や研究内容を紹介している。夏休みに行われているちびっこ博士では、毎年四十近くの研究所、大学、企業等が参加し、小さな子ども達にも理解できるように工夫された展示物や、観察、実験、解説、体験コーナー等が用意されて子ども達を迎えている。私の周りには、宇宙飛行士やロボット開発者、物理学者などの科学者や研究者を目指す友人がたくさんいる。それはきつと、宇宙や科学を身近に感じることのできる機会を、子どもの頃から十分に与えてくれる環境が茨城にあふれているからだと思う。宇宙や科学の不思議を身近に感じながら育つことができるこの環境が、私達の可能性や将来の進路選択の幅を、大きく広げてくれているのだ。茨城ってすごい。心からそう思えた。

こんな風に、私はこの夏、茨城の魅力やすごさに気付くことができた。茨城の良さを発見すると、茨城への愛着が増し、そんな茨城を作ってくれている周囲の大人の方々への感謝の気持ちが自然と湧いてくる。平凡だと思っていた日常が特別に思え、茨城で暮らしていることをこれまで以上に幸せだと感じられるようになった。私が見落としている茨城の魅力は、まだまだたくさんあるに違いない。これからももっと茨城の魅力を発見し、他の人にも茨城の良さを伝えていきたい。そして、将来、私の子ども達が故郷の茨城を誇りに思える様な、より魅力的な茨城作りに貢献できる大人になりたいと思う。

食が織りなす豊かな風景を残したい

県立日立第一高等学校附属中学校 二年 平^{ひら}根^ね宏^{ひろ}佳^か

茨城県は食の豊かな県です。特に私の住む常陸太田市は米処です。そして葡萄や梨など自慢できる果物もあります。

彼方まで見晴らせる広大な平野には緑豊かな田んぼが広がり、鷺が美しい白い羽を休ませます。田んぼを囲むように四季折々に艶やかな色彩で楽しませてくれる山々があります。山々には牛が放牧され、のんびりと草を食んでいます。食が織りなす豊かな景色は私の自慢の一つです。この美しい風景がこれからもずっと続くことを願います。しかし問題を抱えています。農業を担う後継者問題です。

父方の実家は農家です。子供は父と父の兄弟がいますが、

三人とも跡を継ぐつもりはないそうです。理由として、三人とも重労働、不安定な収入を述べていました。

私も祖父母の手伝いとして草取りや田植え、稲刈りを時々しますが、暑かったり、虫に刺されたりと辛い事ばかりです。祖父母も農作業の後は体や腰が痛くなり、愚痴をこぼしてきます。草は抜いても抜いても生えてくるし、根気のいる重労働を課せられます。

収支の面でも個人農業はとても大変だそうです。労働を軽減するために必要な大型機械が高額で、個人で購入するには借金をしなければならなくなるからです。また景気低迷により、安全安心の日本の野菜よりも安価な海外の野菜が売れてしまします。安く叩かれた野菜の収入と野菜を作るのにかかる経費を差し引くと、個人農家は赤字になってしまうそうです。また天災による被害も受けてしまうと計り知れない額になります。

犬の散歩をするので放置された田畑が目につきまます。草が伸び放題で、私が大好きな緑豊かな田園風景とは程遠いです。きつと後継者が見つからないのでしょうか。

放置された田畑を復活し、農業が出来るようにするにはどうしたらいいのでしょうか。

食育の授業で地産地消を習いました。しかし母は地産重視よりも、ほどほどの安心と価格で選んでいるそうです。長く続く不景気やTPPの参加もあり地産地消だけでは個人農家を守る事は無理なのかもしれません。

農業の未来を語るニュースを見掛ける度に祖父は怒ります。

「農業に携わっていない人間は、何もわかっていない。だから他人任せな発言になるんだ。みんなで力を合わせるって言うが、誰も個人農業を救ってくれないじゃないか。もう個人でどうこうする時代じゃなくなっている。世界の農業と戦っていくには、品種改良はもと、コストの削減、低価格だ。個人にそれを押し付けるのは、もう無理な時代なんだ。だから皆やめてゆく。」

祖父の発言は、農業を傍で見ている私には良く理解できません。辛くてきつくて不安定な収入の仕事を続けたいなんて思う人はきつと誰もいないと思います。

それなら、どうやって日本の農業を守って行くのか。この美しい茨城の緑豊かな風景を守って行くのか。私の考えは、県や国が主体となって経営する大農場化です。県の職員として農業に携わる人を雇い、荒れた農地を国や県が買い取りまます。県の職員になれば給料も安定です。雇用問題も解消されまます。企業として農業を進めていけば、コストの削減も災害の備えも上手に経営していけると思います。設備投資も出来、汚くてつらい職業から脱出できます。私はまだ学生なので農業に絡む多くの問題を理解していませんが、農業のスタイルを変えるべき過渡期であると思います。今こそ多くの人の考えを聞き、集約し、良い農業のスタイルを考える時期だと思えます。

私が大人になった時、全世界で育つ子供達が、当たり前のように茨城県の農作物を口にしていたらいいなと思います。そして私が自慢する茨城県の緑豊かな風景が多くの人に愛されるといいなと思います。

「おはよう」から始めよう

阿見町立阿見中学校 二年 水^{みず}落^{おち}花^か梨^{りん}

一日の始まりは「おはようございます」から始まる。それは、言葉を話し始めたころから長年の習慣で、呼吸をしている位、当たり前前の朝儀式。でも、いつの頃からだろうか、恥ずかしさが出てきて、言葉がでなかつたり、でも蚊のなく様な小さな声になってしまいう相手が出てきた。友達には、「おはよう。」って簡単に言えるのだけどなあ。

小学校の時、登校時に旗当番のお母さん達が「おはよう。行ってらっしゃい。」と笑顔で声をかけてくれたのに、静かに下を向いている子が多くて、そんな中で大きな声で返すのは、かなり勇気が必要で、相手が聞こえるぎりぎりの音量で私は返した。その頃の母はいつも嘆いていた。

「なんで、ほとんどの子どもが元気に返事を返してくれないの。こっちは、忙しい貴重な朝の時間を使って、子ども達の安全の為に頑張っているのに。ご褒美に大きな声で挨拶を返してくれてもいいと思わない？」

「私は挨拶しているもん。他のお母さん達には。」

「えー本当？」

そんな母も返事をしてくれないとへこむと言って、自分から挨拶しない時があるそうだから、私達に偉そうに言えた義理ではない。

先生に対しては、学校の中だと挨拶がしやすいが場所が変わるとなぜか難しくなる。友だち相手なら、どこでも気軽に

挨拶ができるのに。

でも、最初は、なかなか話かけづらかった。中学校に入つて、他の小学校から来た初対面の人達に何を話せばいいのか分からず、慣れ親しんだ友達同士で固まっていた。今では、その人達にも慣れてしまい、あの頃の緊張が嘘のようだ。そんな関係になったきっかけは、「おはよう」だったと思う。挨拶を重ねるうちに打ち解けたのだ。

私はソフトテニス部に所属しているが、他の学校との練習時代や大会で顔見知りになった子や先生がいる。「こんにちは」って挨拶すると、仲間になった絆の様なものを感じる。

挨拶とは、人と人をつなぐ、とても大事な道具だ。言葉が通じない外国の人が挨拶だけ日本語で語りかけてくる場面やテレビなどで観るが、その一瞬で日本人は好感を持っていると感ずる。つかみはオッケーという事なのだ。

そうなのだ。挨拶は初対面の人には、きっかけを作り、見知っている人には、さらに絆を深める事は分かり切っている。その時その時に挨拶をすればいいだけ。とてもお手軽なのだ。挨拶しない方が恥ずかしいと思って、自分から声をかけていけば、案外慣れて、今のちゅうちよが馬鹿らしく思えたら、こっちのものだ。それでも、大きな声では始められそうにないので、まずは、朝はこう言う。

「おはよう。」

茨城の未来に向けて想う

水戸市立双葉台中学校 二年 鈴木 木 星 空

私は先日、学校ボランティアで水戸偕楽園を訪れる観光客に園内を案内する「水戸梅まつりボランティア」に参加しました。水戸偕楽園には梅が咲く三月やお茶会が行われる季節には家族で度々訪れます。また、隣接する千波湖や茨城県立県民文化センターでは吹奏楽部のコンクールを行ったりと私の中では地元の身近な場所です。

その水戸偕楽園でのボランティアを行っているとき、他県より来園した方から、

「水戸は古くからの歴史が大事にされているね、震災で復旧するのは大変だけど自慢の故郷をしっかりと守って、後世に残してね。」

と声を掛けられました。

東日本大震災では、私の住む水戸も数々の大きな被害を受けました。しかし、震災から二年が過ぎ茨城県内も徐々に復興が進んできています。震災の時小学生だった私は中学生になり、「故郷茨城で自分も何かできることがあるのではないだろうか。」とその言葉を聞いて考えました。しかし、自分では知っていると思っていた水戸や茨城の歴史や文化を観光客の方に上手く伝えたり、説明したりすることができませんでした。

そこで、私は夏休みを利用して、茨城県立歴史館や弘道館、図書館を訪れ、自分なりにわが街茨城、水戸の歴史や文化を

振り返ってみることにしました。

茨城県立歴史館では、茨城の歴史を原始から現代に至るまでの模型や実物資料などを見学しながら知ることができました。

貝塚や縄文土器、また、鮮やかな赤い文様が描かれた横穴式石室などは当時の生活、文化の移り変わりを知らせてくれるだけではなく、まだ解明されていない歴史を知りたいという思いも持たせてくれました。また、「大日本史」の資料は当時のものが展示されており、編さんには約二百五十年もの月日がかかったそうで、水戸藩二代藩主徳川光圀の大事業を直接目で見ることができそうです。社会の授業でしか知ることのできなかつた歴史の奥深さや雄大さを目の当たりにすることができました。

弘道館は江戸時代の総合大学の役割を担った場所で国の特別史跡、重要文化財に指定されています。現在は震災の影響を受け、建物は復旧のため見学することができません。しかし、当時この場所で水戸藩士が私と同じ年頃で入学し、学問や武芸など多くの知識を学んだことを思うと百年以上もの間守られてきたこの歴史的建造物を私たちの手で守り、残していかなければならないと考えました。

また、私は歴史的建造物以外にも、水戸には「水戸郷土かるた」というかるたがあります。地域の特徴が表れており、ぜひたくさんの方に知って欲しいと思う文化のひとつだと思います。

水戸の史跡や人物・まつりなどから水戸の美しさや素晴らしさを知り、水戸の歴史や文化を多くの人に伝え、私たち自

身もそれらに親しむことができます。水戸郷土かるたは地元では盛んに行われており、私も小学生の頃には水戸市内での選抜大会に参加しました。水戸市内各所で行われる大会が行われ、地域の触れ合いの場になっています。

今回、私は茨城や水戸の歴史や文化を学び知ること、更に故郷茨城を、水戸を大切にしたい、次の世代につなげていきたいと思う気持ちが強くなりました。

私は、「温故知新」という言葉が好きです。古いものを学び直し、そこから新しい知識を見出し自分のものにするという意味です。この言葉のように、私たち学生も茨城について学び、歴史や史跡、文化を大切に後世に伝えていかなければならないと思います。そして、震災からの復興を目指す中で、私も茨城県民のひとりとして、茨城特有の新しい歴史や文化を創造することができるよう日々多くの事柄を学びたいです。そして将来、茨城の未来の街づくりに参加することが私の夢です。

茨城の未来

水戸市立第五中学校

二年

君きみ

嶋じま

朋とも

樹き

母の職場には、他県から仕事に來ている人がたくさんいます。先日、夕食の時に母と祖母がこんな会話をしました。

「宮城から來てる先生がいるんだけど、茨城にはたくさん美味しいものがあるって。」

「そうなの？」

「先生が言うには、『あなたたち、こんなに美味しい食べ物が入っていいわね。お野菜は新鮮だし、お肉だってローズポークが近所のスーパーで買えるのよ。これってすごいことなのよ。』ですって。」

となりで聞いていたぼくは、「ふうん、そんなものかな。」くらいにしか思いませんでした。

でも、改めて考えてみると、一緒に買い物に行って肉のコーナーには「常陸牛」や「ローズポーク」があります。ぼくはあまり好きではありませんが、すごく大きくて新鮮な緑のピーマンもあります。母の友達が秋になる頃、梨や柿を送ってくれて、それはとても甘くて毎年とても楽しみにしています。水戸から那珂湊や大洗までは、早ければ車で三十分位で行けるので、神奈川から遊びにくる親せきは、必ずと言っていいほど、湊に寄って鮮魚を買って行くそうです。

思いかえしてみると、茨城は海も山も湖もあり、水も食べ物も美味しく、住んでいて不自由しない環境だと思えます。ぼくが六年生の時の東日本大震災では、茨城もとても被害を受けました。五浦の六角堂は海に流され、偕楽園も斜面が大きく崩れ好文亭も修繕に時間がかかりました。何よりも福島原子力発電所の事故で、いまだに茨城のきれいな海も風評被害を受けていると聞いています。

美味しい食べ物があつて、海で遊ぶことも山で遊ぶことも簡単にできて、ちょっとドライブすれば、東京に買い物に行ったり、福島や栃木にスキーやスノーボード等の雪あそびに行ったりできます。こんな好環境の茨城をぼくたちは大切

にしながら、もつといろいろな人に知ってもらえるよう努力しなければならぬと思います。

そのために、ぼくは「つなぐ」がキーワードになると思いますが。茨城県の特色を楽しんでくれた人達がリピーターになってくれることだと思います。

例えば、取手の芸術大学の学生さんの作品を県立美術館や笠間の陶芸美術館でみることができるようになりました、笠間の陶芸作家さんの器で、大洗や那珂湊で獲れた魚や常陸太田のお米を食べられるイベントが各地域の「まつり」のなかにあつたり、つくばの学園都市で実験走行しているセグウェイを海浜公園で試走してみたりといった様に、各地域の特色がつかってゆくようなとり組みをすることで、まずは茨城に住んでいるべく達が、茨城を楽しみ良く知ることではないかと思えます。そして、観光に来た人が「今度はあつちも行つてみよう」言ってくれるようになればよいと思えます。

最近では、大洗を舞台にしたマンガができ、ご当地ゆるキャラが全国的に知られるようになり、いわゆる「観光地」以外にも観光のお客さんを見かけるようになりました。

今はまだあまり知られていなくても、十年後、二十年後には茨城の住みやすさや魅力が伝わるように、ぼくたちががんばることが大切です。

そして、少し先の将来には、茨城の魅力が全国各地につたわっているとぼくはとてうれしいです。

最高だつぺ、茨城弁

常陸大宮市立大宮中学校 三年 西野旅人

最近、話題になってる岩手県の北三陸を舞台にしているドラマに、僕もとても好感をもって毎日楽しみにビデオに録画して観ています。そして、何故そんなにこのドラマがおもしろいのかと考えたところ、まず主人公が僕の年齢に近いことや、ストーリー展開、セリフの言いまわしがユニークだからなのかなあと思いました。特に、驚いた時に使われる「じえ」という方言は驚きの度合いが増すにつれて「じえ」の回数が増えるということを知ったとき、ものすごくおもしろい、と思いました。そして、このような方言が僕の住む茨城にもないのかなあといい、さがしてみました。

すると、「だつぺ」(でしよう)とか「ごじゃつぺ」、「ばつち」(末っ子)や「かんます」(かき回す)に「はこぐし」(はこごと)、「あおなじみ」などがありました。「ごじゃつぺ」というのは、でたらめやいい加減という意味です。これは、なんとなく意味が想像できるかなあと思えます。又、「青なじみ」は全国的には、「青あざ」のことで、「なじみ」と「あざ」が結びつかなくて、よく意味がわからないと思います。僕が、僕の年代でもよく使われているので、親しみを感じます。ただ、他の言葉は僕自身はあまり使いませんが、祖父母や父の会話を聞いてみると時々出てきます。

更には、父と結婚して県外から茨城に住むことになった母に聞くと、言葉もだが、なによりイントネーションが茨城独

特のものがあると言います。しかし、生まれてからずっと茨城に住んでいる僕は気づかず、それが当たり前だと思っていました。確かに、僕には二人の妹がいますが、下の小学三年生の妹は、僕の用事で母と週末でかける度に祖父母に預けられ、小さい時から兄弟の中でも特に祖父母と一緒にいる時間が長かったせいも、僕からも「なまってるなあ」と思えません。そして、そんな妹のなまりもなんとなくかわいく、妹らしく思えるのは、方言ならではの温かさや和ませる力のようなものがあるからだと思います。

ふと、今はそんな茨城県の中にいる僕だけれど、近い将来、県外へ出て住むことになった時、自分はどんな風に話すのだろうかと思います。ドラマの主人公のように、堂々となまりを隠すことなく話すのか、もしかしたらなまってることが恥ずかしくて話すことを極力控えようとしたり、必要にせまられて話した時に、なまってると言って馬鹿にされたりするのだろうかと思像してみても、やっぱりその時になまってみないとわかりません。でも、きつと帰省した時はもちろん、同じ茨城出身の友人と話す時には、自然と方言やなまりいっぱい話すのだと思います。やっぱり茨城で生まれ育ったことで、特有のイントネーションは忘れられないものになっていて、話していて温かさや安心感に包まれるからだと思えます。そんな方言やなまりを僕達が使い受け継がれていくうちに今度は茨城の方言やなまりがドラマや小説で脚光を浴びる日がくるかもしれません。

いばらきの未来、私の夢

行方市立玉造中学校 三年 古渡彩乃

私は生まれたときからずっと茨城県民です。おだやかで、おいしいお米や野菜もたくさん作っていて、自然がいっぱいの茨城が私は大好きです。しかし、茨城県の知名度は低く、県の魅力度を調査する「地域ブランド調査」でも毎年ワースト三位に入っています。とても残念なことです。

だから私は、全国の人に茨城の魅力を知ってほしいと思います。そこで、茨城の自慢したいところや、よりよくして伝えたいところを考えてみました。

一つ目に自慢したいのは、野菜やお米などの農作物がおいしいところです。農業が盛んな茨城県では生産量日本一の野菜や果物がたくさんあります。聞き慣れていて深く考えない人も多いと思いますが、「日本一」は改めて考えるところです。私の住む行方市でも、れんこん、せり、水菜、いちごなど六十品目が作られています。

しかし、農業従事者は年々高齢化しており、後継者不足が問題となっています。その対策として、最近ではいろいろな所で「農業はおしゃれでかっこいい」というイメージを若者にもってもらう取り組みがされているようです。私は、おしゃれで機能的な農作業用の服などを農家さんの声をもとに県内のデザイン科・デザイン学校の生徒に製作してもらう試みはどうか、と考えました。また、若者に茨城の農業について知ってもらう必要があると思います。

若い人達が積極的に農業に関われるようになり、茨城から農業のイメージを変えていければいいなと思いました。

もう一つは、自然が豊かなところです。筑波山や袋田の滝のような有名なものもあります。また有名でなくても緑がたくさんある所は多く、空気もおいしいです。これは十分自慢できる場所です。

しかし、変えていかないといけない場所があるのも事実です。その一つが霞ヶ浦です。霞ヶ浦は日本で二番目に大きい湖ですが、それと同時に日本で一番汚い湖でもあります。以前よりはきれいになったようですが、まだまだ汚いです。私は霞ヶ浦のすぐ近くに住んでいます。水はいつ見ても濁っているし、変な臭いがあります。「きれいになったらしいのに」と考えたことも一度や二度ではありません。水が汚い原因の一つは生活用水です。これは周りに住む人達一人一人の心がけが大事です。小さな事でも、面倒がらずみんなで気を付けていきたいです。また、霞ヶ浦の近くの市や町で協力してきれいにする取り組みを本格的にしてほしいです。一生懸命頑張ってくれている人達もいますが、そうでない人も少なくありません。きれいにするため条例や施設を作ればみんなの意識も変わり、昔のような霞ヶ浦に戻ってくるのではないでしょう。きれいなれば、霞ヶ浦は必ず立派な観光資源になります。美しい霞ヶ浦は、きつと茨城の知名度を上げることやイメージアップにつながると思います。

今あるきれいで豊かな自然、そして今よりもっと美しくなった自然をアピールできるように、みんなががんばっていききたいです。

こんなに自慢できるところがたくさんあるのに、全国の人に知られていない、それどころか「地味」と言われるのはとてももったいないし悔しいです。私にとってここは落ち着く場所であり、かけがえのない大切な場所です。たくさんの人に知ってもらい、茨城全体が元気になるといいなと思います。

『みんなに誇れる茨城になってほしい。』

それが私の夢であり、願いです。私が大人になる頃、もつとすてきな茨城になっていますように。

涙

北茨城市立常北中学校 三年 鈴木 木 朝 斐

生まれて初めて、おばあちゃんの涙を見た。十二才の春だった。小学校卒業までの日々をかみしめる、いつもと変わらない日をすごしていた三月十一日から一日たった朝のことだった。そのときはまだ、夢を見ているようで、涙の理由が分からなかった。

十一日。弟は用事があり学校を休んだ。その日は六年生を送る会で、朝から忙しい一日。でも、泣いて笑った幸せな時間をすごした。卒業式も刻一刻とせまっていた。寒い寒い体育館での卒業式の練習。寒いねと声をそろえて友達とホッカイ口で暖をとっていた。その矢先。後に東日本大震災とよばれる出来事が起きた。無我夢中になって校庭に走った。いつもとは違って、長い長い距離のように思えた。足もとを見る

と目が回り、まわりではクラスメイトが転んだ。校舎が倒れると思った。まわりの家はけむりを上げながらかわらが落ちた。母は仕事。父は弟と一緒に。学校には一人。友達としゃべったりすることで気をまぎらわせて、夜十一時ようやく迎えが来た。安心して涙のたまるまぶたを暗闇が隠してくれた。ひなん先は、おばあちゃんの家の近くの平潟小学校。ひたすら朝を待った。

十二日。何か大変なことが起きたとしか分からなかった。おばあちゃんが泣いた。理由は後におばあちゃんの話聞いて知った。十一日に、一緒に行動をとっていたのは、弟、父、おじいちゃん、そしておばあちゃん。父の運転で湯本の方に行っていた。いつもなら四〇分で帰ってこれる道が、四時間以上、車にゆられたらしい。ようやくおばあちゃんの家につき、外にいと、駆けよって来た一人の女性。

「おばあちゃん。お母さん知らない？」

おばあちゃんのいとこの娘だった。今まで家にいなかったことを伝え、分からないと言うと、ありがとうといい、去ってしまったらしい。おばあちゃんも、そのことが気になっていた。そしてあくる朝、またその女性があらわれ、おばあちゃんにこう告げたらしい。

「お母さん津波で行方不明なの。死んじゃったかもしれない。」

おばあちゃんはショックを受け泣いていた。何日しかして遺体が見つかった。私も少ししか会ったことがなかったが悲しかった。人が死ぬことが怖かった。どんな思いだったんだろうとも考えた。

今はこう考える。私たちは奇跡で生き延びたと思う。十一日。本来は、おじいちゃんは、弟の用事について行かないはずだった。しかし、何を思ったのかとつぜんついていくと言ったらしい。おじいちゃんは漁師をしていて、津波警報や台風になると海を見に行ってしまう。平潟の漁師にはよくある事だ。もしもあの時家にいたら、海へ行ってしまっていたかもしれない。今でもたまに思い、すごく怖くなる。茨城でも亡くなった人が多数いる。いつもは、自然に囲まれていてとてもおだやかな茨城。震災後も風評被害に頭を抱え、大変な日々を重ねてきた。私は今回、この大好きないばらきで起こったリアルをみんなに伝えたかった。徐々に元気を取りもどしつつある。でも一つ思っていたことがあった。被災三県に茨城が入っていないことだ。「こんなにダメージを受けたのに……。」と思っていたが、今は、茨城に自分で立ち上がる力が見えたからだと思う。これから未来。震災を思いだして、涙を流す時もあると思う。でも次世代を担っていく私たちは、茨城を愛して、涙よりも笑顔が、あふれる地元にしていきたい。

これから先、いろんな人と出会い、共に生きていく私たちの、舞台に茨城はなつてほしい。

竜巻

県立下妻第一高等学校 一年 佐藤佳名子

二〇一二年五月六日、日曜日。

だんだんと暗く、そして黒く変わっていく空。雨が降り、雷が鳴り、そのうちに雨が止んでいつもの日曜日が何事も無く普通に過ぎ去っていく、そう思っていた私たち。

しかし、この日に竜巻が茨城県つくば市北条地区を中心として襲ったのです。

家族みんなで出かけていた私たちは、家の近くで竜巻が発生したと聞き、急いで家に向かいました。家に向かっている途中に私たちの目に入ってきたのは、折れ曲がっている電柱、倒れかかった信号機。私は、まさかと思いました。そして家に着いて見ると、割れた窓、家の外壁に突き刺さる大木、小屋の上で怯えている犬。本当にここが今まで私たちが過ごしていた場所なのかと疑ってしまうほど変わり果ててしまった姿に驚きました。

また、この日の竜巻で私は一人の友達を失いました。

彼が住んでいた地区は私の住んでいる地区とは違い、隣の地区ですが彼とは同じ保育園に通っていて、小さい頃に一緒に仲良く遊んでいました。竜巻により停電、断水などの被害も受けながら、幼い頃の彼との出来事を思い出し、不安と恐怖に怯えながら眠れない夜を過ごしたことを今でも覚えています。

あの日から少したった二〇一二年八月十二日。

私がつっていた中学校は、竜巻により大きな被害を受けた筑波東中学校地区の近隣の学校として少しでも北条地区の復興の力になりたいと思い、北条地区の復興祭に参加しました。

そこで私たちは、オリジナルでプラスチックコップキーホルダーというものを作り、値段は設定せずに買ってくれる方々の気持ちにお任せして販売しました。

そして竜巻の被害を受けて筑波東中学校地区のリンロードの周りに植えてあった桜の木がたくさん倒れてしまったので、その植林をするためにその時に販売して集まったお金を使うことにしました。

八月というだけあり、暑いなか制服を着たままで声を出しながら歩きまわり、地域の方々にプラスチックコップキーホルダーを販売してまわることは、体力のない私にとってとても大変で辛いことでしたが、竜巻の被害で自分の家を失くしてしまったり、私たちには想像することができないくらいとても辛く苦しい思いをした北条地区の方々のことを考えると、私でも自分にできる限りのことなら何でもしよう、私も暑さに負けないで頑張ろうという気持ちになりました。

また、竜巻によるたくさんの被害を受けてしまったのにも関わらず、地域の方々と一緒に楽しそうに話をしたり、素敵な笑顔を見ながらお祭りを全力で楽しもうとしている北条地区の方々を見て、私はとても勇気づけられたし、北条地区の復興のために私たちが活動しているということに対して、地域の方々にはたくさん「ありがとうございます。」と声をかけてくれました。暑いなか、頑張つてよかったなと心の

底から感じました。

最後に、私は昨年の竜巻の経験を通して、私たち一人一人ができることは小さくて些細なことであっても、それがたくさん集まればとても大きな力になり、人々を元気にしたり勇気づけることができるということや、何が起きるのかを予想することができない毎日を一秒一秒、大切にして生きていかなければならないということ学びました。

私たちの大好きな茨城県に今後、二度と昨年の竜巻のような悲惨な出来事が起こらないことを願っています。

私が支えたい茨城の農業

常磐大学高等学校 二年 武石千智

「茨城県は、もつと若者が農業に興味を持つべきだ。」
私がこのように思う理由は二つある。

一つは、故郷から離れてしまう若者が多いため、県内に残っている人の年齢層は比較的高く、さらに農業を行っている人達を見るとやはりお年寄り中心となっているからだ。

私の祖父は農業を行っている。元自衛官だった祖父は、常に外で行動をしている。野菜を育て、稲作もしているようだ。収穫の時期になると、実った作物を山のように分けてくれ、それらはどれも本当に美味しい。

そんな祖父に、私は昔、質問したことがある。農業を行うことは大変ではないのかと。祖父は少し真剣な顔をして、私の質問に答えてくれた。

「大変か大変ではないかと言われたら、それは大変だ。作物を世話することは時間やお金もかかる上、力仕事が多い。季節の変わり目や天気にも左右されることもある。しかしその分、おいしい作物が出来る。人の笑顔を見ることが出来る。だからまた頑張ろうと思えるのだよ。」

祖父のこの言葉は、高校生となった今でも覚えている。

一見、農業という言葉は良いイメージはあまりないかもしれない。それは泥や虫、力仕事といった感じが強いからではないだろうか。だから若者は農業からどんどん離れてしまっている。しかし、食物を育てなかつたら、私たち人間はどうなるのだろうか。栄養は何から得るのだろうか。このように考えると、やはり作物を育てることは生きる上で大切なのだと分かる。このことを私は多くの若者に知ってもらいたい。

二つ目は、興味を持つことで、より活性化が進み、県としても大きなアピールポイントとなるのではないかと思っただけである。

現状、高校や大学を卒業した人々の中には、県外に行ってしまう人も少なからずいる。確かに、自分のやりたい事は人それぞれであり茨城にはない仕事かもしれない。けれどもここは私たちにとっての故郷であり、大切な場所なのだ。多くのことでお世話になっただろうし、感謝すべきことだっただろう。私は、自分の故郷、茨城県に恩返しをするべきだと思う。そのためなら農業ではなくても良いかもしれない。しかし、農業が盛んであるという県の利点を伸ばしていくことが一番早く効果が出るのではないかと考える。

以上のことより、私はもつと若者が農業に興味を持つべき

だと思った。

もし、農業を営む若者が増えたらどのようなようになるか考えてみた。体力があるため、仕事の時間は減り、何か新しい育て方なども考えられるかもしれない。しかし知識という点では、お年寄りの方々には敵わないだろう。そこはお互い協力し合い、作業していけば効率よく働けることになるのではないだろうか。

私は将来、食関係の仕事をしたいと思っている。初めは単に人の役に立つ仕事をしたいというだけであったが、しだいに「農学」や「品種改良」ということに興味を惹かれた。

もしも一つの種から何種類か別の作物が育てられたとしたら。水が無くても育てられたとしたら。時間や手間をかけずに作業ができたならなど。考えれば考えるほど楽しくなってくる。

そして、自分が学んだことや考えたこと、行動が少しでも茨城の力となれたらいいなと思う。

若者が農業と向き合うことは難しい。もしかしたら、一生農業とは関係を持たず人生を歩む人もいるかもしれない。しかし知ってもらいたい。私たちがスーパーで何気なく買っている野菜や米、小麦製品だって、誰かが汗水流して作っているということ。美味しく食べてもらいたいと思っっている気持ち。感謝の気持ちを持って、茨城の一つの誇りとして、農業をもっと考えてもらいたいと、私は思う。

